Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

# まったく何もないという可能性とその語法

丸山，栄治

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2020-09-25
(Date of Publication)
2021-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7830号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007830

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博　士　論　文

令和 2 年 7 月 10 日

# まったく何もないという可能性とその語法

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程文化構造専攻

丸　山　栄　治

# 目次

序論…… 3

第1章　無と量化…… 8
1.1 「まったく何もない」という文と量化表現 …… 8
1.2 量化表現と「いくつあるのか」という問い …… 11
1.3 文としての「無」の語法と第一の問い …… 13

第2章　無の様相…… 17
2.1 無の可能性と「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問い…… 17
2.2 形而上学的ニヒリズム…… 20
2.2.1 引き算論法 …… 20
2.2.2 形而上学的ニヒリズムと可能世界 …… 22
2.2.3 形而上学的ニヒリズムに対するヘイルの指摘 …… 24
2.3 無と様相表現…… 26

第3章　無についての思考の志向性…… 29
3.1 無についての思考はどのような志向性をもつか…… 29
3.2 単称名辞としての語法（非存在対象としての無）…… 30
3.2.1 プリーストの非存在主義…… 30
3.2.2 マイノング主義における無の問題 …… 32
3.3 文としての語法と無についての思考の志向性…… 34
3.3.1 存在対象でも非存在対象でもない志向的対象としての無 …… 34
3.3.2 志向性の構造…… 36
3.3.3 何もないことはどのような志向的対象か…… 37

第4章　補論：前期ウィトゲンシュタインにおける「世界が存在しない」ということ …… 39
4.1 「倫理学講話」における「世界が存在しない」…… 39
4.2 偽装的な無…… 40
4.3 どの事態も成立していない場合 …… 41
4.4 対象の存在と世界の存在 …… 42
4.5 「いかなる対象も存在しない」は語ることができない …… 44

**4.6** 世界が存在しないならばまったく何もないのか …… **45**

結論…… **47**
付記…… **49**
参考文献…… **50**

## 序論

「何もない」という言葉を正確に理解しようとする場合、その言葉が発せられた状況や、発話者がもともとどのようなものがあると期待していたのか、そうしたことを明確にする必要がある。例えば、冷蔵庫を開けたときに「何もない」と言った場合、たとえそのときに発話者が特定の何かを思い浮かべていたのではないとしても、「何がないのか」と聞かれれば、飲み物や食べ物といった発話者がそこにあると期待していた類のものを答えることができるだろう。このことは、「何もない」や「無」という表現を用いる哲学的な議論の多くにもあてはまる。例えば、「無」が問題だと考える人に「何が存在しないことを問題にしているのか」を聞けば、「人生の意味が」と答えるかもしれない。あるいは、その人が用いる「無」の意味が、「何であれば『存在する』と表現してよいのか」という問いを通じて明らかになる場合もあるだろう。例えば、質量を指して「無」と呼ばれるのは、形あるものこそが存在するという考えに基づくのであり、また、意識が「無」と呼ばれるのは、意識によって認識されるものだけが存在するのであり、認識する当の意識そのものは認識しえないと考えるからである[1]。哲学において「無」が語られる多くの場合でも、「何が存在しないのか」、あるいは、「存在する」という言葉で何を意味しているのかを明らかにすることで、問題のポイントを明確にすることができる。

このような「無」に対して、本論が検討するのは、「何が存在しないのか」、あるいは、「『存在する』という言葉で何を意味しているのか」という問いによっては明らかにできない次のような「無」の語法である。通常、「何もない」という言葉でまったく何もないということを表そうとする場合、例えば、「世界に存在するもののすべてが存在しない」のように、何らかの主語を明示し、その主語が指示するものの存在を否定するという仕方でしばしば言い換えられる。しかし、本論が検討する語法では、「何もない」は何らかの存在の否定や欠如を意味しない。この語法での「何もない」は、何らかの主語が省略された表現ではなく、すでに完結した文であり、これを複数の構成要素からなるような複合的な表現に言い換えることができない。そして、それにもかかわらず、この語法のもとでの「何もない」は、文であり、その真偽を問うことができる。その際に問われているのは、何らかの存在が存在しないかどうかではなく、単にまったく何もないかどうかである。そのため、「何が存在しないのか」、あるいは、「『存在する』という言葉で何を意味しているのか」という問いによっては問題のポイントを明らかにすることができない。「何もないのか、あるいは、そうではないのか」という問いは、最初から存在を問題にしていないからである。そのため、「何が存在するのか」という問いに対する答えがまったく不明なままであっても、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」という問いには、「何もない」は偽であると答えることができる。

---

[1] これらの例は松井（2018）, p. 29 に基づく。

この「何もない」という文の語法は、松井吉康が 2007 年に Philosophisches Jahrbuch に掲載した論文「存在の呪縛（Der Bann des Seins）」で明らかにしたものである。この論文で松井はこの「無」の語法を次のような文脈で問題にしている[2]。それは、「何もない」の真偽を問う問い、すなわち、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」が、論理的に考えうる第一の問いとして問われる文脈である[3]。ここでの「論理的に考えうる第一の」という言葉は、次のことを意味すると考えられる。まず、まったく何もないということは矛盾を含んでいないという意味で論理的に可能であり、「何もない」は真と偽の両方の可能性がある[4]。そして、いかなるものの存在も「何もない」が偽であることを前提にしている。例えば、目の前の机が存在するのは、何もないのではない場合に限られる。仮に、それが錯覚であったとしても、その錯覚（眼の前に現れている机のようなもの）の存在は、「何もない」が偽であることを前提にする。「何が真に存在するのか」という問いに対する答えが何であったとしても、そのように問いうるのは、「何もないのか」という問いに偽と答えられる場合に限られるのである[5]。また、「何もない」が偽となることを定めるような神のような存在を考えることはできない。というのも、そのような存在が存在しているならば、それは何もないのではないことを前提にしているからである。こうした意味で、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」、すなわち、「『何もない』は真か偽か」は第一の問いである。以上のことは、この問いに答えるために何を知らなければならないのかという点から述べ直せば次のようになる。この文脈で用いられる「何もない」は「特定の何かが存在しない」ということを意味していない。そのため、「何もないのか」という問いに答えるために、存在論的な様々な問い、例えば、「過去は存在するのか」、「数は存在するのか」、「神は存在するのか」といった問いに対して予め何らかの答えにコミットする必要はない。目の前の机の存在であれ、神の存在であれ、我々が暗黙に存在すると考えているもの、あるいは、本当に存在するかどうか答えが出ていないものついて、「何もないのか」という問いは一切問題にしていない。そのため、この問いに対しては、存在論的な様々な問いに対する答えがまったく不明なままで、「何もないのではない」と答えることができる。したがって、「何もないのか」という問いに答えるために、「何が真に存在するのか」という問いに答える必要はない。何が存在するのかということについてのいかなる主張も何もないのではないということを前提にはするものの、「何もないか、あるいは、そうでないか」という問い自体は何らかの存在に関する問いではないのである。本論は、この「何もない」の真偽が第一の問いとし

[2] 松井は自身の主張をこのような仕方で常に語法と文脈に分けて論じているわけではない。しかし、本論では、後述するように、無の他の語法との比較という問題設定のためにこれらを区別する。また、松井は、この語法のもとでの「何もない」を、ドイツ語で「Nichts」、英語で「Nothingness」、その否定を「Nicht-Nichts」「Non-nothingness」とも表現している（*Ibid.*, p. 65）。これらの表現は、be 動詞や存在することを意味する語彙を用いなくてすむという利点がある。しかし、本論では、この語法での「何もない」が文であることを強調し、単称名辞としての語法と区別するため、主に、この語法のもとでの無を「何もない」「まったく何もない」「何もないのではない」などの文によって表現する。

[3] *Ibid.*, p. 32.

[4] *Ibid.*, p. 66.

[5] *Ibid.*, p. iii, p. 18. 「何が真に存在するのか」という問いだけでなく、しばしば「究極の問い」と呼ばれる「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いに対しても、本論第2章で述べるように、「何もないのか」という問いが先行する。

て問われる文脈で語られる「無」の語法を問題にする。

「何もないということは存在の否定を意味しない、そして、それにもかかわらず、その真偽を問うことができる」という主張は、あまりに唐突で受け入れがたいかもしれない。松井の主張を主題とする先行研究は今のところなく、また、本論が参照する分析哲学における無の議論でも、「何もないことは可能か」という問いが立てられてはいるものの、本論の第2章でも確認するように、そこで実際に問題となるのは「現実世界には何がどれだけ存在するか」という存在論的な問題であって、存在の否定ではないような無の可能性が検討されているわけではない。「何もない」にはそのような語法のもとでしか表現できないような内容が本当にあるのだろうか。

ここで一度、松井が主張するとおり、「何もない」という文が存在の否定を意味せず、真偽を問いうる意味のある表現であると仮定しよう。ここから矛盾が帰結すれば、我々はこの仮定を否定しなければならない。まず、我々が何を仮定しているのかを確認したい。我々が仮定しているのは、「現実に何もない」や、「何もないということが現実に生じうる」ではない。ここで仮定しているのは、「何もない」の真偽を問うことが可能だということだけである。そして、もちろん、現実には「何もない」は偽であり、そして、第2章で確認するように、それは時間の経過に関係なく偽であるため、将来それが真になることはありえない。そもそも、「現実に生じうる」ということが、「存在しうる」ということを含意するならば、「何もないということが存在しうる」という表現は意味をなさない。なぜなら、何もないということと、何かが存在しうるということは相容れないからである。したがって、「現実には何もないということはない」、あるいは、「そのようなことは現実には生じえない」という主張は、我々の仮定とは矛盾しない。また、我々がここで仮定しているのは、何らかの神秘的な経験ではない。「何もない」という文が言い表していることは、主題的にも非主題的にも、知覚や感情や気分のように経験することはできず、イメージとしても把握できないからである。したがって、「そのようなことを経験することはできない」という主張も我々の仮定と矛盾しない。では、何もないということそのものに矛盾は含まれるだろうか。松井は次のように述べている。

> 端的な無は、論理的には矛盾を含まない。そこには矛盾がない。そもそも矛盾が成立するには、互いに相容れない二つの可能性が必要なのだが、端的な無は、その定義上そうした複数の可能性を持ち得ない。したがって無は矛盾を含まない。つまり論理的には可能なのである。[6]

「丸い三角は存在するか」が両立し得ない性質をもつものの存在を問うているのに対して、上記引用の中で「端的な無」と表現される何もないことは、そうした性質をもっていない。何もないことは矛

[6] *Ibid.*, p. 67.

盾を含まないという意味で、論理的に可能なのである。このように、「『何もない』という文は存在の否定を意味しないが、その真偽を問うことができる」と仮定したとしても、直ちに矛盾が生じるわけではない。

この語法のもとで表現される「何もない」の内容に矛盾がないということは、「『何もない』という文は存在の否定を意味しないが、その真偽を問うことができる」という主張から矛盾が帰結しないということを意味するだけでなく、この主張の根拠にもなっている。この語法のもとでの「何もない」が表現している可能性は、現実に何かが起こりうるという可能性ではなく、単なる論理的な可能性である。そして、論理的な可能性は、他の可能性とは異なり、当の事柄が矛盾しているかどうかだけがそれが可能であることの条件であり、それ以外の制約はない。したがって、何もないということの可能性を考える上では、矛盾がないということが十分な根拠となるのである。

この根拠のもとで、まったく何もないという視点が確保される。そして、この視点から、何もないのではないということが第一の真理であるということ、すなわち、何が存在するにせよ、存在することは何もないのではないということを含意するということが明らかになる。松井は、何もないのではないということが「存在の究極の含意である」と述べる。ただし、このことはどのような事柄が何もないのではないということを含意するのかということについては何も述べていない。目の前の机や思惟する私が存在するという事実は、「何もない」が偽であることと両立するかもしれない。しかし、「何もない」が偽であるからといって、そのことだけからは、目の前の机の存在や思惟する私の存在が導き出されるわけではない。もちろん、過去の存在や数の存在についても何も導き出すことができない。何もないのではないということは、世界については何も明らかにしないのである。

本論の目的は、以上の「無」の語法が分析哲学において論じられてきた他の「無」の語法とどのように異なるのかを明らかにすることである。上記の主張の中で、何が存在するとしても、「何もないのか」という問いに対して、「何もないのではない」という答えが与えられることは、直観に大きく反するものではないと思われる。むしろこの文脈に関する主張以上に問題となるのが次の点であると本論は考える。すなわち、なぜすでに認められている「無」の語法ではなく、存在の否定を意味しないような「無」の表現を要するのか。そこで、本稿では、「何もないのか」という問いが第一の問いとして問われる文脈があることを認めた上で、どのような語法がその文脈に適切であるのかという観点から、問題の語法を他の語法と比較する。本稿で論じる語法は、分析哲学において論じられてきた2つの語法を含む以下の3つの語法である。

(a) 量化表現としての「無」
(b) 単称名辞としての「無」
(c) 文としての「無（何もない）」

(a)の量化表現の「無（nothing）」は、「・・・であるようなものは（ひとつも）存在しない」を意味し、他の量化表現「…であるようなものが少なくともひとつある（There is at least…）」「あるものが…である（Something is…）」などの否定によって言い換えることができる。例えば、「私の銀行口座には（残高が）何もない（There is nothing in my bank）」は、「私の銀行口座には少なくとも1つの（1円の）お金がある、ということはない」と言い換えることができる。分析哲学においては、自然言語の「nothing」は一般的には量化表現であって、極端な場合は、カルナップのハイデガー批判にみられるように、それ以外の語法は実際には無意味だとする考えもある。しかし、近年では、(b)の単称名辞としての「無（nothing）」の語法も意味のある表現として議論されている。例えば、「Nothing comes from nothing」という文を考えよう。この文に現れる二つの「nothing」をどちらも量化表現として読むならば、「～∃x～∃y（x comes from y）」となる。これは言い換えれば、「∀x∃y (x comes from y)」、すなわち、「すべてのものは、あるものから生じる（Everything comes from something.）」となる。しかし、この文は 「無からは何も生じない」という意味でとることもできる。この場合、「Nothing comes from nothing」という文の最初に現れる「Nothing」は量化表現としての無であり、最後の「nothing」は単称名辞だと考えねばならない。これら(a)と(b)の無の語法に対して、(c)の文としての語法は、既に述べたように、何らかの存在を否定する表現ではなく、そして、量化表現としての無や単称名辞としての無が文を構成する部分であるのに対し、この語法のもとでの「何もない」はそれ自体で文として成立し、真偽を問うことができる。本論は、これらの語法の比較を通して、問題の文脈において(c)の文としての語法が必要であることを明らかにする。

以上の語法の違いについて、本論では次のような順序で論じる。まず、「第1章　無と量化」では、量化表現としての「無」と文としての「無（何もない）」を対比し、前者の表現を含む文が数えられるものを問題にするのに対し、後者が問題にする無はそうではないことを示す。「第2章　無の様相」では、分析形而上学において可能世界意味論をもとに論じられている無の可能性についての議論をとりあげ、文としての「何もない」の真偽を考えるとき、関連する様相表現は不可欠なものではなく、可能世界意味論をもとに論じることが適切ではないと主張する。「3.無についての思考の志向性」では、単称名辞としての無と文としての無の違いを、無についての思考がどのような志向性をもつのかという論点とともに明らかにする。最後に、「4.補論：前期ウィトゲンシュタインにおける『世界が存在しない』ということ」では、以上の章で示された「無」の文としての語法の特殊性を別の角度から明確にしたい。まったく何もないということが第一の問いとして問われる文脈は、存在の問題に根本的に関わっているにも関わらず、現実世界のあり方については問題になっていない。この点について、世界があるということと世界がいかにあるかということを区別し、ある意味で前者を重視した前期ウィトゲンシュタインの哲学を取り上げ、一見類似する問題を扱っているようにみえる両者が根本的に異なる主題を扱っていることを示す。

# 第1章 無と量化

本章では、量化表現としての語法のもとでの「無（nothing）」を含む文が数えられるものを主題にしているのに対し、文としての語法のもとでの「無（何もない）」はそうではないと主張する。まず、「何もない」という文を量化表現としての「nothing」を含む文に置き換えることができるという想定されうる見解を検討する（1.1 節）。次に、数えられないものがありうるという主張が何を意味しうるかということについてのエリック・T・オルソンによる説明を参照する（1.2 節）。最後に、文としての語法のもとでの「無」が量化表現を含む文に置き換えることはできないという主張を、いくつかの想定されうる反論とともに検討する（1.3 節）。

## 1.1 「何もない」という文と量化表現

「何もない」という表現は様々な文脈で用いられる。通常、この文は無数の文脈において存在の否定を意味する。そのため、この文を明らかにしようとすれば、何が存在しないのか、あるいは、「存在する」という言葉で何を意味しているのかを文脈に応じて明らかにする必要がある。言い換えれば、「何もない」という文だけを与えられても、発話者が何を問題にしているのかは明らかではない。同様に、もし「何もないのか」という問いが第一の問いとして問われる文脈における「何もない」が存在の否定を意味するならば、そこでは何が存在しないのか、「存在する」とは何を意味するのかを明示する必要が生じる。しかし、松井によれば、この文脈での何もないということを何らかの存在を否定する形で規定しようとする場合、次のような困難が生じる。この場合、その存在の否定がまったく何もないということを意味するような存在を理解しなければならない。しかし、そのような存在とは何かという問いに最終的な答えを与えることは困難である。我々は有限な存在であるため、「これで存在のすべてを経験した」と断定することができないからである。そのため、我々にとって存在すると思われるものがことごとく存在しないと考えたとしても、それで本当にまったく何もないということを考えたことになるのか知ることができない[7]。このように、この文脈での「何もない」が存在の否定を意味する場合には、その意味についてさらなる説明が必要であるにもかかわらず、その意味を最終的に確定することができないという困難がある。他方で、この文脈での「何もない」が存在の否定を意味しないとする場合、すなわち、文としての「無」の語法とする場合には、「何もない」という言葉は、

[7] 松井（2018）、p. 30. また、松井は次のようにも述べている。「哲学の歴史は、前者［「何かが存在する」］を問題にしてきたのだが、これまでのところ、この「存在」への問いに答えられた者はいない。なぜなら私たちは、「存在する」という言葉を様々な意味で用いて、その意味を確定することができないからである（そもそも私たちは有限なので、すべての存在を経験し尽くすことができない）。他方「無ではない」というのは、「まったく何もない」という可能性が否定されているのである。つまり「端的な無は偽である」ということである。こちらの場合、「まったく何もない」という言葉に不明瞭なところは何もない。それは「とにかく（どういう意味にせよ、何であるにせよ）何もない」と言っているのである。」（*Ibid.*, pp. 84–85、［ ］内は引用者による補足。）

まったく何もないという意味しかなく、それ以上説明の必要がない。そのため、発話者が想定している存在論や多様な文脈によってその意味が変わるということはなく、我々が有限の存在であるということもこの意味と関係がない。というのも、この場合、何が存在するのかということは、「何もない」という文の意味を規定しないからである。同様に、「何もない」の否定である「何もないのではない」にも曖昧さの余地はない。したがって、「何もないのではない」は「（特定の）何かが存在する」ということと同義ではない。一般的には、「何もないのではない」を「何かが存在する」に言い換えても問題がないように思えるが、前者が常に同じひとつの意味しかもたないのに対し、後者は発話者が明示的にあるいは暗黙に前提している存在論や文脈に応じて意味が変わってしまうからである。

「何もない」が存在の否定を意味する場合、この文はそれだけではその意味をひとつに確定することができないという松井の主張に対し、次のような見解が考えられるかもしれない。すなわち、「何もない」という文が量化表現の「無（nothing）」を含むと考えるならこの問題は解決するのではないか。どんなものであっても、自分自身と同一である（x=x）という性質をもつとしよう。このとき、「自分自身と同一であるようなものは何であれ存在しない（～∃x（x=x））」という文は、明確で完結した文である。そして、この否定は「自分自身と同一であるものが少なくともひとつ存在する（∃x（x=x））」である。この「∃x（x=x）」は、何か特定のものを「a」と表記するなら、「特定のものaは自分自身と同一である（a=a）」や「a が存在する（∃x（x=a））」と同義ではない。このことは、「すべての人間が死ぬ」ということを知るために、過去から未来にわたって存在する個々の人間が死ぬことを知る必要がないのと同様である。「自分自身と同一であるものが少なくともひとつ存在する」が正しいかどうかを知るために、必ずしも「a は自分自身と同一である」や「a が存在する」を知る必要はない。それがどれであるかはわからないが、少なくともひとつは自分自身と同一であるものが存在するということがわかればよいのである。したがって、もし松井の主張のポイントが、「何もない」という文は、存在するものについては何も特定せず、かつ、完結した文として真偽を問えるという点にあるなら、これを「自分自身と同一であるものがひとつも存在しない（～∃x（x=x））」という量化表現を含む文に置き換えれば、明確な仕方で「何もない」を表現できるかもしれない。そして、文としての語法という馴染みのない語法を持ち出す必要もないのではないか。実際、「∃x（x=x）」が偽になる意味論がある。標準的な述語論理では、この文は常に真である。というのも、標準的な述語論理の意味論では、議論領域に少なくともひとつものがあるとされるからである。しかし、議論領域が空であることも認める普遍自由論理では、この文は偽でありうる[8]。この場合には、「自分自身と同一であるものが少なくともひとつ存在する（∃x（x=x））」は「何もないのではない」と同義とみなしてよいのではないか。

このような見解に対して、我々は、文としての語法によって表現される何もないということを、量化表現を含む文によって置き換えることはできないと主張する。すなわち、「何もない」と「自分自身と

[8] Nolt (2018), Section 1.3.

同一であるものがひとつも存在しない（～∃x（x=x））」は同義ではなく、「何もないのではない」も、「自分自身と同一であるものが少なくともひとつ存在する（∃x（x=x））」と同義ではない。というのも、「何もないのではない」という表現は、「少なくともひとつ」といえるようなものの存在を問題にしていないからである。

我々の主張は、何もないということを表現するための適切な形式化とはどのようなものかを吟味するものである。次節に移る前に、我々の形式化についての吟味について述べておきたい。ティム・クレインは、形式化についての可能な理解の仕方を記述的アプローチと改訂的アプローチの2つに分けている[9]。記述的アプローチは、既に用いられている自然言語の文の隠れた論理形式や意味論的構造を表示する。このアプローチにおいて、形式化は、＜われわれの実際の語り方のできるだけ多くについて、その構造を十分に説明しているか＞に応じて評価される。一方、改訂的アプローチについては次の通りである。

> 第二の理解の仕方は、問題になっているような形式化を、＜なんらかの科学的・哲学的な目的のためにわれわれの語り方を改訂すること＞を提案するものとみなす。ここでの目的は、われわれの語り方に隠れた実際の「論理形式」ないし「意味論的構造」を捉えることではなく、むしろ、曖昧で不明瞭で誤解を招く語彙を取り除くことによって、世界に関するわれわれの理論のより厳密な表示を作り出すことなのである。[10]

この改訂的アプローチは、発話者がどのように母語である自然言語を用いているかとは無関係に、世界に関する我々の理論を厳密に表示することを目的とする。本論で形式化を吟味する際にとるのはこの改訂的アプローチである。ただし、それは、このアプローチをとるとされるクワインのように、世界についての最良の理論のための形式化ではない。本論では、「何もない」ということの真偽が第一の問いとして問われる文脈において、そこで問われている「何もない」を正確に表示することだけを目的とする。もちろん、「何もない」という表現の形式化が自然言語と無関係であるわけではない。松井が述べるとおり、まったく何もないということを英語で表現するためには、be 動詞や存在を意味する動詞を、否定を表す語とともに用いなければならないが、漢字文化圏では「無」は文字として「存在」から独立している[11]。このことは、「無」の文としての語法の可能性を示唆するかもしれない。しかし、我々の目的は、ヨーロッパ諸語ではない言語、例えば、日本語を母語とする発話者の語り方を明らかにするものではなく、第一の問いという文脈において用いられる「何もない」を考える

---

[9] Crane (2012), pp. 44–45（邦訳：p. 92）. 志向性の現象を視野に入れ、存在しないものの量化を検討するクレインは、記述的アプローチをとっている。
[10] *Ibid.*, p. 45（邦訳：p. 92）.
[11] 松井（2018）, pp. 69–72.

上で、「曖昧で不明瞭で誤解を招く語彙」を取り除くことにある。

### 1.2 量化表現と「いくつあるのか」という問い

「何かがある（There is something）」ということが述語論理において形式化される場合、これは「少なくともひとつ何かが存在する（There is at least one thing）」ということと同義とされる。しかし、「少なくともひとつ」といえるためには、たとえそれが何であるか特定されていないとしても、数えられるようなものでなければならない。そして、そうであるなら、述語論理では数えられないものの存在を問題にすることはできないのではないか。以下ではこの問いにおける「数えられる」「数えられない」ということを理解するため、エリック・T・オルソンの論文「同一性・量化・数」を参照する。オルソンは、数えられないものがありうるという主張が、同一性と量化と数について従来受け入れられている考えと両立しないことを踏まえた上で、この主張に対して反論している。本節では、量化と数と同一性の結びつき、そして、数えられないものがありうるという主張が何を意味しうるかという点についてオルソンの論述を概観する。

一般的に量化と同一性がそれぞれ数とどのように結びついていると考えられているのか。オルソンは、それを三つの原理として整理する[12]。

量化原理：何かがFである ⇔ 少なくともひとつのものがFである。
同一性原理：x=y ⇔ xとyがひとつのものである。
同一性原理：x≠y ⇔ xとyがふたつのものである。

これらの原理によれば、それぞれの左辺は、数についての表現を含むそれぞれの右辺と論理的に同値である。＜Fであるものがある＞、＜何かがFである＞は、＜Fであるものが少なくともひとつある＞ということであり、＜この対象はあの対象と同一である＞とは、＜両者がひとつのものである＞ということ、そして、＜両者は同一ではない＞とは、＜両者がふたつのものである＞ということである。

もし数えられないものがあるならば、これらの原理は成立しない。とりわけオルソンが問題にしているのは、左辺から右辺が導かれないということである。すなわち、数えられないものがある場合、上記の原理に対応して、以下のことが可能であることになる。

何かがあるにもかかわらず、そうしたものが少なくともひとつあるわけではない
あるものとあるものが同一でありながらひとつのものではない
あるものとあるものが別のものでありながらふたつのものではない

[12] Olson (2012), p. 66（邦訳：pp. 131–132）.

オルソンによれば、これらが可能となるのは、「強い意味で数えられないものがありうる（there could be strongly uncountable things）」が真であるときである。オルソンはこれを不可算テーゼと呼ぶ。この「強い意味で数えられないもの」とは、それについて「いくつあるのか」という問いすら立てることができないものを意味する。例えば、「超限基数を超えるほど多くあるから数えられない」 や「同一性が曖昧であるために正確な数を数えられない」という意味で数えられない場合、これらは強い意味で数えられないわけではない。というのも、これらの場合、「いくつあるのか」と問うことは可能だからである。例えば、「超限基数を超えるもの」がいくつあるのかという問いに対しては、「どんな数で捉えられるより多くのものがある」と答えることができるし、「同一性が曖昧なもの」がいくつあるのかという問いに対しては、「確定的な数はわからない」と答えることができるのであり、「いくつあるのか」という問いを拒むものではない。これらの場合に対して、「強い意味で数えられない」といわれる場合は、「いくつあるのか」という問いを立てることさえできない。オルソンが強い意味で数えられないものとして検討しているのが、素材のかたまり（portions of stuff）である。素材（stuff）は、「いくつあるのか」という問いを問うことができない。例えば、水はどれくらいあるか（How much water there is?）を問うことはできるが、水はいくつあるのか（How many water are there?）を問うことができない。「水がいくつあるのか」という問いを問うことができないのは、英語の文法においてそのような表現ができないからではない。鈴木が訳注で述べているとおり、日本語の場合は文法的な誤りであるとまではいえないだろう[13]。素材は、特定の自然言語の文法にかかわらず、問いを立てることが意味をなさないようなものなのである。この素材について、英語の文法の中で語ることができるようにするために、「かたまり（portion）」という可算名詞が用いられる。素材のかたまりは、それがいくつあるのかと問うことはできない。このかたまりは、水滴のように、周りの環境から区別され、恣意的でない境界線をもつものではない。それは「小片（piece）」と呼ばれ、「かたまり」とは区別される。素材のかたまりは強い意味で数えられないという主張、特に、分子のような最小単位の構成要素をもたない「ネバネバ（gunk）」と呼ばれる素材は強い意味で数えられないという主張に対して、オルソン自身は反論を展開している。しかし、我々の目的は、「数えられない」ということの意味を確認することであるため、実際に数えられないものがあるかという点についてはこれ以上確認せず、最後に不可算テーゼと量化原理の関係についてオルソンの指摘を確認しておきたい。オルソンによれば、不可算テーゼが誤りであるならば、量化原理と2つの同一性原理は正しいことになる。量化原理については、オルソンは次のように述べている。

[13] オルソン（2015）, p. 162, 訳注 4.

ここで、不可算テーゼが誤りであるとしよう。すると、何であれどんなものについても、それがいくつあるのかを──「非可算無限個」であれ、「ゼロより多くふたつより少ない」であれ──言うことがつねに可能であるということになる。このときには、＜Fであるものがある＞ということは＜Fであるものが少なくともひとつある＞ということを含意するだろう。というのも、Fであるものを「ゼロ」以外の数で記述できる──曖昧にであれ正確にであれともかくできる──ならば、それは「少なくともひとつある」を含意するからである。すると、量化原理は真であることになる。[14]

もし不可算テーゼが誤りである、すなわち、あらゆるものが曖昧にであれ正確にであれ数えられるのであれば、＜何かがある＞ということから＜何かが少なくともひとつある＞ということがいえる。言い換えれば、無条件に「何かがある」ということと「何かが少なくともひとつ」ということが同義であるとはいえないということである。

### 1.3 文としての「無」の語法と第一の問い

量化表現を含む文は「いくつあるのか」を問えるものについての真理を問題にしている。他方で、「何もないのではない」という文は、「いくつあるのか」を問えるものだけに関わるのではない。したがって、「何もないのではない」と「何かが少なくともひとつある」は同義ではないと本論は主張する[15]。以下では、このような主張に対して想定されうる二つの批判的見解を検討したい。

まず、このような区別を重視することは厳密過ぎると考えられるかもしれない。実際に、オルソンは強い意味で数えられるものがあるかどうかという議論は興味深いものではないかもしれないと述べ、それを擬似数の（quasinumerical）記述を定義することによって示そうとしている。擬似数の記述は次のように定義される。

少なくともヒトツのものがFである $=_{df}$ 何かがFである
ちょうどヒトツのものがFである $=_{df}$ あるものがFであり、Fであるどんなものもそれと同一である。
ちょうどフタツのものがFである $=_{df}$ あるものがFであり、それとは別のものもFであり、Fであるいかなるものもこれらの一方あるいは他方と同一である。[16]

さて、Fであるもののカズがあるのは、ヒトツのFがあるか、フタツのFがあるか、・・・等などのとき、かつそのときのみである。以上は、量化原理や同一性原理の同値関係を定義で置き換え、さらに、ヒ

[14] *Ibid.*, p. 71（邦訳：p. 140）.
[15] 本論では、強い意味で数えられないものが現実に存在しているかどうかは問わない。そうしたものが現実にはなかったとしても、意味の上で「少なくとも1つ何かが存在する」という表現がものの数を主題としているために、これを文としての無の語法のもとでの「何もないのではない」と言い換えることはできないからである。
[16] *Ibid.*, p. 80（邦訳：p. 157）.

トツ、フタツ、といった疑似数としてカゾエラレルことを定義したものである。このような疑似数の記述は、強い意味で数えられないものが現実にあるとしても問題なく定義できる。強い意味で数えられないものがあるとしよう。それがFを満たす場合、「少なくともひとつのものがFである」とは言えない。しかし、「少なくともヒトツのものがFである」と述べることはできる。さらに、それがFであり、Fであるどんなものもそれと同一であるといえるならば、「ちょうどヒトツのものがFである」と述べることもできる。オルソンによれば、もし不可算テーゼに関心を向けることに違和感をもつ人がいるとすれば、その人は「ひとつ」や「ふたつ」でヒトツやフタツを意味しているのかもしれない。そうであるとすれば、ここまでの議論で我々が数えられるとしてきたものは、擬似数の記述の定義により、カゾエラレルのだから、その人々にとってはもとから「数えられる」のであり、我々が強い意味で数えられないものとしてきたものがあるとしても、それらもまたカゾエラレルのであって、その人々にとっては「数えられる」のである。このように、オルソンは不可算テーゼの重要性そのものに疑いを向けることができると述べる。

オルソンの擬似数の記述の定義を用いれば、我々の主張に対する1つ目の批判的見解を次のようにまとめることができる。我々は、「何もないのではない」と「自分自身と同一であるものが少なくともひとつある」ということが同義ではないと主張したが、オルソンの擬似数の記述の定義を用いれば、「何もないのではない」と「自分自身と同一であるものが少なくともヒトツある」と同義であると言えないだろうか。というのも、「自分自身と同一であるものが少なくともヒトツある」は、自分自身と同一であるものがあると言っているだけだからである。そして、「まったく何もない」と「自分自身と同一であるものはヒトツもない」が同義であると考えれば、「まったく何もない」を存在の否定として解することもできるのではないか。

このような見解の問題を二点指摘したい。まず、同一性の概念が適用できないものがあるのではないかという問いが残るという点である。もしそのようなものがあれば、「自分自身と同一であるものが少なくともヒトツある」は、自分自身と同一であるものだけを問題にしているといえる。この点について、オルソン自身も、同一性の概念が適用できないものがあるならば、ヒトツやフタツの定義から、すべてのものをカゾエルことができるわけではないということになると述べている。もうひとつの問題は、このような議論の動機の問題である。確かに我々が量化表現を用いる場合に、厳密に数えられるものだけを問題にしているわけではないかもしれない。少なくとも日常的な場面では、「いくつあるのか」という問いを問うことができるか吟味しなければ、量化表現を用いることはできないということはないだろう。そのような場合には、量化表現が用いる無数の文脈を考えれば、「何もないのではない」を「少なくともひとつ何かがある」ということと言い換えることに何ら問題はないように思われる。例えば、冷蔵庫を見ながら「何もないわけではない」と発話するならば、それを「少なくともひとつ食材や飲み物がある」と言い換えることができるだろう。ただし、発話者の直観に依拠するこうした議論は、1.1節で確認した記述的アプローチに近い。しかし、我々は文としての無の語法の表現

を吟味するにあたって改訂的アプローチをとる。そのため、我々が実際にどのように語っているかを唯一の基準とするのではなく、第一の問いとして「何もないのか」という問いが問題となる文脈のもとで「何もない」と「何もないのではない」がそれぞれ他にどのように言い換えることができるのかを考えねばならない。この文脈で考える場合、「まったく何もない」ということだけから、議論を始める必要があるのであり、それ以外に我々が現実世界において受け入れている存在についての理解に依拠してはならないのである。

次にもうひとつの批判的見解を検討したい。我々の主張によれば、「何もないのではない」と「何かが少なくともひとつある」は同義ではない。そのため、何もないのではないということを厳密に表現しようとすれば、述語論理における式は適切ではないということになる。しかし、そうであれば、例えば、目の前の机が存在するということから何もないのではないということを帰結するような、妥当と思われる推論をどのように説明すればよいだろうか。述語論理では、例えば、「Fa」から「∃xFx」が帰結することは存在汎化という推論規則によって妥当である。このような推論規則が適用できるのは、「Fa」や「∃xFx」が、名前 a や述語 F、特称量化子などを含む構造的特徴を備えているからである。しかし、「何もない」という文がこうした特徴をもたず、ただ文であるという特徴しかもたないとすれば、「何もない」は「N」、「何もないのではない」は「～N」という命題論理の原子式において認められるような構造しかもたないことになるだろう。これらが推論の前提や帰結に現れる場合に、存在汎化を適用することはできない。我々の主張は、文の構造によって説明すべき推論をそのままにしてしまうのではないか。

この批判的見解について、まず確認しなければならないのは、ここでも「無」の文としての語法が問題となる文脈である。我々は、「何もないのか」という問いが第一の問いとして問われる文脈について、それに適した「無」の語法を問題にしている。この文脈では、「何もない」の真偽だけが問われている。序論でも述べた通り、この文脈では何が存在するのかは明示的にも暗黙的にも一切問題になっていない。そして、同様に、どのような構造的特徴をもつ文が存在を含意する内容をもちうるかということも、この文脈からは特定することはできない。確かに、「富士山が存在する」ということが真に何らかの存在を表しているならば、そこから何もないのではないということがわかるかもしれない。そして、我々は「富士山が存在する」という文がもつ構造、「∃x(x=a)」といった構造を基準にして、「何もないのではない」がそれらと関連する構造をもつはずだと考える。しかし、何らかの存在を含意するのがこの構造をもつ文だけであるのかどうかは必ずしも明らかではない。また、そもそも、「∃x(x=a)」という構造をもつ文が真であるとしても、それが本当に存在を含意するかどうか、それが何もないのではないということを前提としうるかどうかは、「何もないのか」という問いが第一の問いとして問われる文脈だけからは知ることができない。というのも、ある文が量化表現を含むということと、それが「何もないのではないこと」を前提にすることは必ずしも同じことではないからである。例えば、自然数を量化している場合の「6 より大きく 10 より小さい自然数が少なくともひとつある」における

「ある」は、「目の前の机にりんごが少なくともひとつある」という文における「ある」とは同じ意味で「ある」わけではないだろう。また、虚構の対象についての量化を認める場合には、明らかに特称量化を含む文であっても存在を含意するわけではない。そのため、例えば、「目の前の机が存在する」ということから「何もないのではない」ということを帰結するような推論が妥当であるかどうかは、問題の文脈だけからはわからないのである。では、この文脈にとどまる限り、我々は、この問いに答えることはできないのか。「何もないのか」という問いに答えるとき、確かに、この文脈の外で、我々の現実世界での経験をもとに、「特定のもの a が存在するから何もないのではない」と答えることもできるが、そうした経験に基づくことなく、「とにかく何もないということはないのだ」と答えることもできる。すなわち、「特定のもの、例えば、数えられるものが存在するかどうかにかかわらず、とにかく何もないということはない」と答えることができる。「何もない」が偽であるということは、それ以上のこと、「何が存在するか」について何も含意しないため、我々は常にこの後者の答え方の余地を残さなければならない。このように、「まったく何もない」がどのような構造をもつ文なのかを明らかにしようとする際に、われわれがもっている存在についての理解を前提にすることはできない。「何もないのか」が第一の問いとして問われる文脈において、理解の順序は逆であり、「何もないのではないということを前提にする」ということが存在について唯一明らかにできることである。そして、どのような事柄が「何もないのではない」ということを前提にするかは何も明らかにならない。以上より、まったく何もないということを表す文としての語法は量化表現としての語法から区別すべきなのである。

# 第2章 無の様相

文としての語法のもとでの「まったく何もない」は現実には明らかに真ではない。それは単に可能であるというだけである。では、それはどのような可能性か。無の可能性については、すでに可能世界意味論のもとで様々に検討されてきた。この章では、そうした試みが文としての語法のもとでの何もないという可能性を論じるのに適切であるかどうかを問題にする。まず、「何もないことが可能である」という主張が、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いに関する議論の論点となることを確認し、この論点に対して松井の議論と可能世界意味論のもとでの議論のそれぞれでどのように論じられているかを述べる(2.1)。次に、可能世界意味論のもとで検討されている何もないが可能であるということを帰結する引き算論法とそれに関する議論を概観する(2.2)。最後に、「無」の文としての語法のもとでの「何もない」に関する文の真偽を問題にする際、様相表現は不可欠のものではないと主張する(2.3)。

## 2.1 無の可能性と「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問い

「まったく何もない」は明らかに偽である。では、「まったく何もないことは可能である」は真だろうか。この問いは、「なぜあるものがあって何もないのではないのか(Why is there something rather than nothing?)」という問いを検討する上でしばしば論点にされる。というのも、この「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文が問いであるならば、それは、まったく何もないことが可能であり、そして、それにもかかわらず、あるものがあるという、2つのことを前提にしているからである。もし、まったく何もないことが不可能であるならば、この問いは厳密には問いではないという仕方で解決される。

文としての「無」の語法のもとでの表される何もないということは可能か。まず、ここで問題となる可能性は、序論で確認したように、矛盾を含まないという意味での論理的な可能性である。そして、この場合の論理的な可能性とは、存在しうるという意味での可能性や、現実となりうるという意味での可能性ではない。というのも、まず前者については、「何もないということが存在するか」を問うことはできないからである[17]。確かに、「無は存在しない」という表現がしばしばなされる。しかし、それが語られるのは、「無」が存在しないものを意味する場合である。すなわち、「存在しないものは存在しない」という同語反復を表している。何もないことと存在しないものは異なる。何もないということについては、それが可能かどうかを問うことはできるが、それが存在するかどうか、存在しうるかどうかを問うことはできない。したがって、「まったく何もないことが存在しうるか」という問いも意味をなさない。ま

[17] 松井(2018), pp. 39–40.

た、端的な無という可能性は、ある時点で現実となりうるという意味での可能性でもない[18]。というのも、現実になりうる、実現しうるということは、何もないのではないことを前提にするからである。確かに、この宇宙はいずれ消滅するかもしれない。しかし、そのような消滅は何もないのではないことを前提にする。そのため、「まったく何もない」ということが偽である場合には、まったく何もないということが不可能であり、その意味で、必然的に偽なのである。また、「まったく何もない」が真である場合には、何かが生じるということもありえない。そのため、「まったく何もない」が真である場合には、それが偽とはなりえないという意味で、やはり、必然的に真である。さて、何もないことはこのような可能性であるため、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いは問いとしては正しくない。というのも、この問いの問いであるための前提のひとつである「あるものがある」も、この問いの答えとして想定されているような存在の根拠や原因も、何もないのではないことを前提にするからである。既に述べたように「何もないのではない」が真である場合には、何もないことは不可能なのであり、この問いは問いとして成立しない。では、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文は何を語っているのか。松井は次のように述べている。

> 原初のものは、それが原初である限り、それに先行する原因や根拠を受け付けない。したがって「なぜ無ではないのか」という問いは、実は問いとしては正しくない。しかしだからといって無意味なわけでもない。この「問いの形をした文章」は、まぎれもなく何かを語っているが、それは決して解答を要求する問いとしてではない。それは、論理的には「何もない」ことが可能であるにもかかわらず、実際には「何もないのではないこと」に対する私たちの「驚き」を表明しているのである。それは究極の不思議である。しかしそれを原初の問い、根本の問いということはできない。それは実は問いではないからである。原初の問いは「無か無ではないのか」である。[19]

このように、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文において現れる「何もない」が、「無」の文としての語法として用いられているならば、この文は驚きの表現ではあっても問いとしては意味をなさない。

分析哲学の文脈においてもまた、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いとの関連において何もないことの可能性が問われてきた。それは、「形而上学的ニヒリズム（Metaphysical Nihilism）」と呼ばれる主張をめぐる議論である。形而上学的ニヒリズムとは「具体的対象が存在しない可能世界が現実世界から到達可能である」という主張、あるいは、その主張を支

[18] *Ibid.*, pp. 43–44.
[19] *Ibid.*, pp. 5–6

持する立場のことである[20]。この立場の正当性に関する議論が、「何もないことは可能か」という問いに答えを出すと考えられている。周知のように、可能世界という概念は必然性や可能性といった様相的語法を分析するために導入された。この可能世界という着想のもとでは、例えば、「ある事柄が必然的に真である」は「すべての可能世界においてある事柄が真である」と言い換えられ、必然性や可能性といった様相を含む文の真理値は、可能世界のすべてに対する量化によって規定される[21]。この可能世界という着想をもとにすれば、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」は次のように言い換えられる。「現実世界を含むあらゆる可能世界の中には何も存在しない空虚な世界というものも存在する。このとき、なぜ現実世界は空虚な世界なのではなく、空虚ではない世界であるのか」。こうした言い換えを採用していると考えられるのが、ピーター・ヴァン・インワーゲンの論文「そもそもなぜ何かがあるのか（Why is There Anything at All?）」である。この論文の中でヴァン・インワーゲンは、「空虚な世界」を「具体的対象が存在しない可能世界」とし、そうした世界が現実世界になる確率が極めて低いことを示すことで「なぜあるものがあって何もないのではないのか」に答えようとする[22]。ヴァン・インワーゲンの提案に対し、ジョナサン・ロウは、この問いにおける「無」を「具体的対象が存在しない可能世界」とするヴァン・インワーゲンの想定については認めつつ、しかし、そのような可能世界の存在を認めない。というのも、ロウによれば、抽象的対象の存在は具体的対象の存在に依存し、抽象的対象はあらゆる可能世界に存在するため、具体的対象もまたどの可能世界にも存在すると考えるからである[23]。

ヴァン・インワーゲンやロウのような「具体的対象が存在しない可能世界」の存在に対する否定的な立場、すなわち、この意味での無はほとんど起こりそうにないか、あるいは、まったく不可能であるとする主張に反対して立てられたのが、ボールドウィンの引き算論法（Subtraction Argument）である[24]。引き算論法とは名前の通り、現実世界から到達可能な世界の中には、現実世界を構成している具体的対象をひとつひとつ差し引いた世界が存在し、そして、具体的対象がまったく存在しない世界もまた存在するということを証明しようとしたものである。その後、この引き算論法の前提の正当性や論証の妥当性が議論されるようになり、形而上学的ニヒリズムをめぐる議論の発端となった。この議論において、例えば、コギンズは、引き算論法が失敗し、具体的対象がまったく存在しないことが不可能であることを示すことによって、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」に決定的な答えを与えると主張している[25]。次節では、引き算論法をめぐる議論の一部を概観する。

---

[20] この主張を表すために、ボールドウィンはもともと「ニヒリズム」という語を用いていたが、その後ロウが他の「ニヒリズム」の用法からから区別するために「形而上学的ニヒリズム」という言葉を導入した。（Lowe(2002), p. 62）
[21] 飯田(1985), p. 277.
[22] インワーゲンによれば、「根本の問い」によって問題にされている存在（being）とは机や椅子のような具体的対象の存在であり、「具体的対象が存在しない可能世界」、数や集合といった抽象的対象のみから構成される可能世界は「無」とみなされる。van Inwagen (1996), p. 95（邦訳 pp. 57–58）.
[23] Lowe (1996), p. 115.
[24] Baldwin (1996), p. 232.
[25] Coggins (2012), p. 7.

## 2.2 形而上学的ニヒリズム

### 2.2.1 引き算論法

ボールドウィンは「具体的対象が一切存在しないということが可能である」ということが現実世界で真であることを示すため、次の引き算論法を提示する[26]。引き算論法の前提は次の3つである。

(A1) 具体的対象の有限個の領域をもつ可能世界が存在するかもしれない。

(A2) その可能世界に含まれる各々の具体的対象は存在しないかもしれない。

(A3) これらのどの具体的対象の非存在も、別の具体的対象の存在を必然化しない。

これらの具体的対象に関する3つの前提から、引き算論法は次のプロセスで結論にいたる。

(1) (A1)より、現実世界 W から到達可能な具体的対象が有限個ある領域をもつ可能世界 $w_1$ が存在する。

(2) (A2)より、$w_1$ から到達可能な次のような世界 $w_2$ が存在する。$w_2$ は、$w_1$ の領域の任意の具体的対象 $x_1$ が存在せず、そして $x_1$ が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象のすべても存在しない世界であり、それ以外は $w_1$ とまったく同じような世界である。

(3) (A3)より、$w_2$ の領域は $w_1$ において存在しないものを含まないので、$w_2$ の領域は $w_1$ より小さい。

(4) $w_1$ から $w_2$ を得る引き算のこの手続きを、次のような可能世界 $w_{min}$ に到達するまで反復する。$w_{min}$ は、それが存在しないことによって領域の具体的対象のすべてが存在しなくなるような一つ以上の具体的対象からなる領域をもった世界である。

(5) (A2)より、これらの具体的対象のうちのひとつの非存在が可能であるので、$w_{min}$ の領域のすべての具体的対象が存在しない $w_{nil}$ が存在する。

(6) (A3)より、$w_{min}$ の領域のすべての具体的対象の非存在は、他の具体的対象の存在を必然化しないので、$w_{nil}$ は具体的対象が一切存在しない世界である。

まず論証の前半である(1)〜(3)の記述に注目しよう。ここでは、可能世界 $w_1$ から到達可能であり、かつ、可能世界 $w_1$ に含まれるある具体的対象 $x_1$ が存在しないような可能世界 $w_2$ が存在することが示される手続き、いわば最初の一回分の引き算の手続きが示されている。(2)の記述の内にみられる「$x_1$ が存在しないだけではなく、$x_1$ が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象の

[26] Baldwin (1996), pp.232–233.

すべても $w_2$ には存在しない」とは、次のような例を考えることができる。$w_1$ にはあるメガネ $\alpha$ とその $\alpha$ の部分であるレンズ $\beta$ が存在するとする。このとき、このメガネ $\alpha$ が $w_2$ で存在しなければ、$\alpha$ の部分であるレンズ $\beta$ も $w_2$ では存在しなくなる。そのため、一回分の引き算の手続きで、$\alpha$ だけでなくその部分 $\beta$ も存在しないような $w_2$ が得られる。前提(A3)より、ある具体的対象の非存在が別の具体的対象の存在を必然化することはないため、引き算される前の世界と後の世界では後者の方がその世界に含まれる具体的対象の数が少なくなる。このような引き算の手続きを $w_{min}$ に至るまで繰り返すのである。

そして、論証の後半である(4)〜(6)は、最後の引き算の手続き、すなわち、$w_{min}$ から具体的対象が一切存在しない世界 $w_{nil}$ を得る手続きが示されている。この最後の引き算の手続きは、消去される具体的対象について、先程みた引き算の手続きとは若干異なった規定がなされている。上記で確認した(2)では「$x_1$ が存在しないだけではなく、$x_1$ が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象のすべても $w_2$ には存在しない」とされていた。一方最後の引き算の手続きにおいて(4)では $w_{min}$ の領域は「それが存在しないことによって領域全体の具体的対象のすべてが存在しなくなるような一つ以上の具体的対象からなる」とある。これは、$w_{min}$ から到達可能であり、かつ、$w_{min}$ に含まれるいずれかの具体的対象が存在しない世界は、必ず $w_{min}$ に含まれている具体的対象が一切存在しない（したがって、具体的対象を一切含まない）$w_{nil}$ であることを示している。したがって、(4)の $w_{min}$ に関する規定は、$w_{min}$ から $w_{nil}$ への到達が最後の引き算の手続きとなるように設定されたものである。

ボールドウィンによれば、世界間の到達可能性関係が推移的であれば、現実世界から $w_{nil}$ に到達可能である[27]。すなわち、推移的な到達可能性関係を R とすれば、$WRw_1$、かつ、$w_1Rw_2$、かつ、・・・、かつ、$w_{min}Rw_{nil}$ であり、すなわち、$WRw_{nil}$ となる。したがって、「具体的対象が一切存在しないことが可能である」は現実世界で真であると帰結される。

具体的対象が一切存在しないことが可能であるということが現実世界において真であるかどうかを問題にするにあたって、ボールドウィンの引き算論法は、この論法の三つの前提と具体的対象の定義との関連、論証そのものの妥当性などを論じる必要性を明らかにした。そして、実際にそれぞれの論点について様々な見解が提出されてきた[28]。しかし、引き算論法を正当化するためには、引き算論法とは独立に、そもそも「具体的対象が存在しない世界」が存在すること、それが可能世界のひとつであることを示さなければならない。というのも、可能世界の捉え方によっては、「具体的対象が存在しない世界」は可能世界とは認められず、その場合、引き算の手続きは $w_{min}$ でストップするからである。引き算論法は、「具体的対象が存在しない世界」が可能世界として認められたことを前提に、それが現実世界から到達可能な諸世界の一つであることを示すものなのである。では可

[27] *Ibid.*, p.232.
[28] Coggins (2012), p.144 (Note3. 4.).

能世界をどのように捉えれば、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界のひとつと認めることができるのか。

### 2.2.2 形而上学的ニヒリズムと可能世界

可能世界とは何かということについては様々な見解が提示されてきた[29]。たとえば、可能主義では、現実世界が存在するのと同じように他の可能世界も実際に存在し、現実性は各々の世界において指標的なものとされる。一方、現実主義では、現実に存在するのは現実世界のみであり、可能世界は現実世界において存在するものによって構成される。こうした可能世界に関する見解の相違に応じて、「具体的対象が存在しない世界」が可能世界のひとつであるかという問いに対する答えは異なるものになる。この対応関係について、ここではコギンズの分類を取り上げたい。コギンズは「具体的対象が存在しない可能世界」を可能世界のひとつとして認められるか否かという点から可能世界に関する理解の観点を次の３つに分類する。すなわち、世界の「合成的観点（compositional view）」「「容器」的観点（'container' view）」「代替的観点（ersatz view）」である[30]。

可能世界について合成的観点をとる可能世界論は、世界を個々の内容から合成された（composed）ものとして理解する。したがって、この観点のもとでは、世界は個々の内容の存在なしには成立せず、具体的対象が存在しない可能世界は成立しない。この観点をとる可能世界論として、コギンズはルイスの様相実在論（Modal Realism）とアームストロングの組み合わせ主義（Combinatorialism）を挙げている[31]。ルイスはあらゆる可能世界が現実世界と同様にそれぞれ具体的に独立して存在すると考える。ルイスの様相実在論において可能世界とは「時空的に相互に関係する事物の最も大きいメレオロジー的な和」である[32]。したがって、可能世界を構成する具体的対象が存在しないことは、可能世界そのものが存在しないことと同じであり、ルイスは「具体的対象が存在しない世界」が可能世界であることを認めていない[33]。

可能性に関する組み合わせ主義（Combinatorialism）を主張するアームストロングもまた、空虚な可能世界の存在を否定する[34]。アームストロングは、可能世界が具体的に存在するというルイスの想定を認めない現実主義の立場をとり、現実世界の個物、性質、関係を実際とは異なる仕方で組み合わせることで可能性を説明する。したがって、アームストロングは可能世界についてルイスとは異なる立場に立つものの、組み合わせの要素がない場合は構成される世界も存在しないため、ルイスと同様、空虚な世界を認めていない。

ルイスやアームストロングのような合成的観点に対して、容器的観点から可能世界を考えた場合、

---

[29] 飯田(1985), p. 275.
[30] Coggins (2012), p. 27.
[31] *Ibid.*, p.28.
[32] Lewis (1986), p. 69.
[33] *Ibid.*, pp.73–74.
[34] Coggins (2012), pp.28–29.

可能世界は個々の内容から合成される（composed of）のではなく、それらを含む（contain）容器のようなものであり、内容とは別個の対象と考えられる[35]。この容器的観点によれば、世界それ自体は、その世界に含まれる対象には含まれない。すなわち、容器は容器の内容とは明確に区別される。一見すると、この場合は引き算論証の最後の段階において世界そのものは残り、空虚な世界が成立するように思われる。しかし、中身の存在に依存しない容器としての世界が実質的には何なのか、そして、引き算の最後の手続きにおいて本当にそれは取り除かれないのかという点について困難が残る[36]。

合成的観点、容器的観点のいずれも「具体的対象が存在しない可能世界」を認めることができないと考えられるのに対して、代替的観点から可能世界を考えた場合、そのような空虚な世界を認めることができる。コギンズは、可能世界を「事物がそのようでありえた極大無矛盾な仕方」とする見方を世界の代替的観点と呼ぶ[37]。この場合の世界は具体的対象から合成されたものではない。世界は、その世界におけるすべての事柄の真偽を決定するような極大事態や命題の集合である。コギンズがこの代替的観点の例として挙げているのがプランティンガとボールドウィンの立場である。プランティンガは、アームストロングと同様に現実主義の立場をとり、可能世界を「可能な極大事態」と考える[38]。しかし、アームストロングがこの極大事態を現実世界の具体的な要素の組み合わせとするのに対し、プランティンガはもしその世界が現実であるなら成立しているはずの事態をすべて決定するものとして世界を扱うという点で異なる。ボールドウィンも同様に、ルイスの可能主義をとらず、また、現実世界の具体的な個物、性質、関係それぞれをそのまま組み合わせるのではなく、それらの表象（representation）を代替者として用いることによって可能性を説明する[39]。コギンズによれば、この代替的観点では世界は、世界のあり方を決定するようなルールのようなものであり、この場合にのみ、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界とみなすことができる[40]。例えば、代替的観点に分類されるプランティンガの立場をとるならば、ある可能世界において具体的対象がまったく存在しないとしても、その世界は矛盾を含まないひとつの可能な事態としてこの現実世界の中で認められるからである。すなわち、この代替的観点では、世界そのものの存在を世界の中身の存在から独立に問題にすることができるのである。以上の分類からコギンズは、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界のひとつとして認めること、すなわち形而上学的ニヒリズムの立場をとる場合、可能

---

[35] *Ibid.*, p. 31.
[36] *Ibid.*, p. 32. ここでコギンズが容器の候補として挙げているのが時間と空間である。しかし、時間と空間を容器とみなす場合、それは時間と空間の絶対説の立場をとることになり、一般的に擁護するのが難しいとコギンズは指摘している。またコギンズは何かを含むような容器として基本的には具体的なものを考えており、それは合成的観点と同様の問題、つまり、引き算の最後のステップにおいて「世界そのもの」も取り除かれてしまうという問題が残ることを指摘している。
[37] *Ibid.*, p. 35.
[38] *Ibid.*, p. 35.
[39] Baldwin (2001), p. 141.
[40] Coggins (2012), p. 37.

世界については代替的観点をとらなければならないと考える。

コギンズは引き算論法そのものの欠陥を指摘しており、最終的には代替的観点をとったとしても現実世界から空虚な世界への到達可能性は保証されず、現実世界において無は不可能であるという結論を出している[41]。そして、この結論から、コギンズは「何かが存在する」ことは必然的であって、このことは「なぜあるものがあって何もないのではないのか」に対する決定的な答えとなるとしている。しかし、ここでコギンズが「無」と呼んでいるのは、「具体的対象が存在しない可能世界」のことである。では、そもそも「なぜあるものがあって何もないのではないのか」を考えるにあたって、このような想定は適切であるのだろうか。

### 2.2.3 形而上学ニヒリズムに対するヘイルの指摘

形而上学的ニヒリズムをめぐる議論では、「具体的対象が存在しない可能世界」が存在し、現実世界からその世界へと到達可能かという問いを論じることによって「無は可能か」という問いに答えようとする。そして、現実世界のものをひとつひとつ差し引くという引き算論法のアイディアからもわかるように、ここで想定されている無は、ものがひとつもないということである。しかし、このような形而上学的ニヒリズムの基本的なアイディアに対して、ジョン・ヘイルは、問題にすべき無は「それに何かを加えたら無ではなくなるようなもの」ではないと述べる[42]。次節で述べるとおり、このようなヘイルの指摘は、本論第1章での我々の主張と重なるものであるが、本節では、ヘイルの論述に従って彼の無の概念を確認する。

「なぜあるものがあって何もないのではないのか」に対するヘイルの答えは、「他の選択肢がないから」というものである。すなわち、ヘイルによれば、「もしあるものが存在するならば無ではありえなかった（If there is something there could not have been nothing）」[43]のであり、かつ、実際にはあるものがあるのであるから、無ではありえないのである。ヘイルは、ここで問題となっている無を明らかにするにあたって、「まったくの無とは正確には何か（What exactly is *nothing at all*?）」「無とは何であるのだろうか（What would nothing *be*?）」という問いから始める。ヘイルが「なぜあるものがあって何もないのではないのか」において問題にされるべきだと考える無をヘイルの言葉にしたがって「まったくの無（nothing at all）」と呼ぼう。ヘイルは我々が「なぜあるものがあって何もないのではないのか」を問題にする際に無という語でイメージしやすい他の事柄、すなわち、「神がとりえた選択肢の一つ」「空虚な空間（empty space）」「ビッグバンに先行する事柄（the precursor to the Big Bang）」が本来考察されるべき無とは異なると述べる。以下ではヘイルが提示するこれら三つの事柄との違いから彼の無の概念を確認する[44]。

---

[41] *Ibid.*, p.137.
[42] Heil (2013), p. 173.
[43] *Ibid.*, p.180.
[44] *Ibid.*, p.174–176.

まず、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」を問題にする際に「神があるもの（a something）を創造するかどうかを決定する」という伝統的なイメージを持ち出すことはできない。なぜなら、創造に先行する神もまた「あるもの（a something）」だからである。そのため、「あるもの」と無のいずれかを神が選択するという場面を想定することはできず、神が選択していたかもしれない無というイメージを維持することは困難であるとヘイルは述べる。

次に、ヘイルによれば、無は「空虚な空間」ではない。すなわち、宇宙を構成しているものをすべて差し引くことが可能であるとしても、そのような操作によって残るのは、「空虚な空間」であって、無ではない。「空虚な空間」も「あるもの」である。「まったくの無」は、現実にあるものを差し引くことによって得られるものではない。そうした操作が可能であるように思われるのは、「まったくの無」が「空虚な空間」と混同されているからである。

最後に「まったくの無」は「ビッグバンに先行する事柄」ではない。ビッグバンは空虚な空間、あるいは空間そのものもないような何らかの状態から生じたと説明されるかもしれない。しかし、それら「ビッグバンに先行する事柄」は「まったくの無」と同じではない。というのも「まったくの無」は「あるもの」に変化するような起点となるものを一切提供しないからである。

以上のように、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いにおいて無として想像されやすい「神の選択肢のひとつ」「空虚な空間」「ビッグバンに先行する事柄」といったものは、特殊な「在り方」のひとつであって「まったくの無」ではない。無をこのように区別するとき、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」における「何もない」を、「まったくの無」とするか、実際には「あるもの」に含まれるような無とするかによって、この問いの意味と解答可能性は異なるものとなる。

> 「なぜ何かがあるのか」「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いは当の無が実際にはあるもの（a something）、すなわち、空虚な空間、真空、ビッグバンに先行する事柄であるような場合にのみ意味をなす。（中略）このように考えるとき［無が実際には「あるもの」のように考えられる場合］、ひょっとしたらわれわれはビッグバンに先行する事柄に接近する方法をもたないためにその答えを発見することができないのかもしれないが、そうだとしても、この問いには答えることが可能であると考えられる。それに対して、もし無が絶対的な存在の欠如として考えられるなら、その問いは扱うことさえできない。[45]

「なぜあるものがあって何もないのではないのか」における無が「あるもの」「あり方のひとつ」としての無であるならば、この問いは意味をもち解答可能である。すなわち、どのようにして「ビッグバンに

[45] *Ibid.*, pp.175–176 ［ ］内引用者.

先行する事柄」からわれわれが知るような宇宙が生じたかについての説明を与えることはできるかもしれない。しかし、この問いにおける無が、絶対的な存在の欠如、すなわち、「まったくの無」であるならば、この問いにはもともと答えがない。

以上のように、ヘイルは「まったくの無」と実際には「あるもの」に含まれるような無とを区別することによって、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いを解答不可能な問いと解答可能な問いに区別する。そして、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」は、その問いの根本的な性格のために、後者の無ではなく前者の「まったくの無」を問題にしていると考えられるのである[46]。そして、これらのヘイルの主張は、明らかに、松井の「無」の文としての語法に関するいくつかの主張と同じであると考えられる。ヘイルの一連の主張が、「まったくの無」という概念に依拠していることは明らかである。ヘイルは、「もし何もなかったならば、あるものがあるということは不可能であっただろう（Had there been nothing, it would not have been possible for there to be something）」という想定まで提示して「まったく何もない」という可能性に言及している[47]。では、この可能性はどのような可能性であるのか。

### 2.3 無と様相表現

以下では、「無」の文としての語法のもとで何もないという可能性を問題にする際に可能世界意味論が適切でないと主張する。この主張は、何もないという可能性が数えられるものに関する可能性ではないという点と、「何もない」という文がとりうる真理値を考えたとき、ここでの様相表現を省略することができるという点の2つからなる。1つ目の点については、2.2.3 節で確認したように、ヘイルが形而上学的ニヒリズムに対して指摘した点であり、また、すでに本論の第1章で主張したように、何もないという文は量化表現を含む文に置き換えることができないということから明らかである。2つ目の点については、まず何もないということに関する様相表現を確認したい。松井は、次のように述べている。

> ［中略］「端的な無であれば、それは端的な無であり続ける」し、「無ではないのであれば、それは無ではないことに留まる」のである。[48]

また、パルメニデスの二つの道を解釈する中で、同様の点を次のように述べている。

> ［中略］もし、「まったく何もない」のであれば、それは「まったく何もない」ままでなければならな

[46] *Ibid.*, p.180.
[47] *Ibid.*, p.180.
[48] 松井（2018）, p. 43.

い。つまり無は、それが真であるなら、必然となる。［中略］「無ではない」が真理であれば、無は不可能となる。[49]

この引用に現れる様相表現を、次のように表すことができるだろう。ここでは、何もないということを「N」で表すとする。

(1)　N → □N
(2) ～N → □～N

(1)は、何もないのであれば、何もないということが必然であることを表し、(2)は何もないのではないのであれば、何もないのではないことが必然であることを表す。これらの対偶から次の式がえられる。

(1’) ◇～N → ～N
(2’)　◇N → N

(1’)は、何もないのではないことが可能であるのであれば、何もないのではないということを表し、(2’)は、何もないことが可能であれば、何もないということを表す。しかし、序論で述べたように、何もないということが可能であるというだけではそれは真にはならないはずであり、何もないのではないということも同様である。この点を考える前に、以下の式も確認しよう。

(3) □N → N
(4)　N → ◇N

(3)は、必然的に何もないのであれば、何もないということを表し、(4)は、何もないのであれば、何もないということは可能であるということを表す。(3)と(4)は問題なく認めることができるだろう。このとき、(1)(2’)(3)(4)より、以下がえられる。

(5) □N ↔ N ↔ ◇N

すなわち、まったく何もないということについては、それが必然的に真であることと可能的に真であ

[49] *Ibid.*, p. 115.

ること、そして、実際に真であることが常に一致してしまうのである[50]。

このことが意味するのは、何もないということが様相表現抜きで真であるか偽であるかそのいずれかでしかないということである。では、(1)や(2)のように様相表現を用いた表現がなされるのか。それは、この現実世界のある時点において我々が「何もない」という文の真理を吟味しているからである[51]。すなわち、「何もない」が偽であることを我々がある時点で知るならば、それは、過去でも未来でも、あるいは、たとえ時間の外で起こりうる事柄を想定したとしても、どんな場合にも「何もない」が真になることはありえないことが明らかになるということを意味する。しかし、何もないが真か偽かということだけを考えれば、すなわち、第一の問いが問題となる文脈においては、そのような今とは別の時点や時間の外で起こりうる事柄など、無数の起こりうる（起こりえた）場合は問題にならない。何もないということは、真であるか偽であるかそれだけなのである。他方で、我々は、「まったく何もないということが、矛盾を含まないという意味で論理的に可能である」と述べた。この文における可能性は、単に、「『何もない』ということは矛盾を含まない」や「『何もないということ』は真か偽かのいずれかである」ということを意味するのであって、現実世界を起点とする様相とは無関係であり、混同を回避するならば、第一の問いが問題となる文脈においては可能性という言葉を用いる必要がないと考えられる。したがって、何もないということの真理を考える上で様相表現は不可欠のものではなく、必ずしも可能世界意味論のもとで考察する必要はないのである。

---

[50] 以上の点は、伊佐敷（2010）の議論を参照した。伊佐敷は、リチャード・テイラーの論理的決定論について検討する中で、テイラーの論理的決定論から必然性・現実性・可能性という三つの概念の放棄という許容しがたい帰結が得られるとしている。（伊佐敷（2010）, p. 120）

[51] 何もないということの真理と時間との関係について松井は以下のように述べている。
「つまり問題となっているのは『まったく何もない』という『時間に制約されない可能性』の真偽である。もちろん端的な無は偽である。しかしそれは、時間の中で偽となるのではない。或る時点で偽となるのではない。それは『今』、偽であることが証されるのであるが、そこで『一挙に』時間を超えたところで真理であることが明らかとなるのである。
ちなみに、ここで言及される『今』をどう捉えるか、であるが、『無ではない』という真理が私たちに現れるのは、私たちの『今』においてだけである、ということを意味していると読むべきである。もちろんそうした『私たちの今』が、『真に』存在するのかどうかは自明ではない。私たちは、時間の外側に立つことができないからである。しかしそのことは、時間が『真に』存在することを意味しない。つまり『無ではない』が、『今』、あらわになるとしても、それは『無ではない』の時間性を意味するのではない。私たち『死すべき者』は、その各々の『今』において『無ではない』という『神々の真理』と出会うのである。」（松井（2018）, p.119）

# 第3章　無についての思考の志向性

本章では、無についての思考がどのような志向性をもつのかという問いに対し、無を単称名辞としての語法と文としての語法のそれぞれのもとで考えるとどのような違いが生じるかを示す。3.1 節では、無についての思考がもつ志向性についてしばしば指摘される問題を提示する。3.2 節では、「無」を単称名辞として扱う場合として、無を特殊な非存在対象として扱うマイノング主義の立場を取り上げ、どのように無の志向性の問題を解決しているのかを確認する。3.3 節では、無を文としての語法のもとで考え、何もないことを存在する対象でも非存在対象でもないような志向的対象として特徴づけられると主張する。

## 3.1　無についての思考はどのような志向性をもつか

我々の思考は、常に特定の何かについての思考である。この「何かについてのものである」、あるいは、「何かに向けられている」という性質が志向性である。志向性は、思考に限らず、「知る」「信じる」「恐れる」「望む」などの動詞で表されるような心的状態一般の特徴とされている。言い換えれば、心的状態は常に何らかの対象（志向的対象）をもつ。では、無についての思考はどのような志向性をもつのだろうか。まず、ここでの無についての思考を次の四つと区別しておこう。まず、無について考えるということは、何も考えないことではない。我々が本論で検討している無はどの語法のもとであれ、思考の対象となっている。次に、この章で検討する無についての思考は、冷蔵庫に何もないということを考えることとは異なる。冷蔵庫に何もないということを考えている場合、思考の対象となっているのは食べ物や飲み物が入っていない冷蔵庫であって、無ではない。また、デイル・ジャケットが述べるように、「死んだら何を考えるのか」という問いに対して「何も（ない）」と答えられるかもしれない。しかし、それは、その人が死んだ後に無について考えているというわけではなく、その人は思考だけでなく他のいかなる心的状態ももっていないと理解されるべきである[52]。最後に、無についての思考は、漠然とした不安のような明確な対象をもたないような経験について考えることとは区別できる。確かに、そのような経験は何ら対象が見出されないという意味では「無」と呼べるかもしれない。しかし、そのような経験をもっていない場合にも我々は無について考えることができる。

無についての思考の志向性について考えるとき、しばしば次のような困難が指摘される。我々は常に何かについて考えるのであって、無について考えられるとすると、それは無（nothing）を何か（something）に変えてしまうのではないか。すなわち、無とは何であるかという問いに答えようとすると、自ずと無ではないものを考えることになるのではないかという指摘である。この指摘は、次の2つ

[52] Jacquette (2013), p. 96.

に分けることができる。まず、何かについて考えることは、常に何らかの意味でその対象を現実に存在するものに変えてしまう。しかし、無は現実に存在しえない。したがって、無について考えることはできないのではないかというものである。もうひとつは、何かについて考えることは、それを常に何らかの性質をもつものとして考えることを意味する。しかし、無はいかなる性質ももたない。したがって、無について考えることはできないというものである。無についての思考がもつ志向性は、無について厳密に考えようとすればするほどこのような困難をもつように思われるのである。この困難は、無についての思考の対象を単称名辞として表現する場合も、文として表現する場合にも、何らかの解決が求められる[53]。この問題について、次節では、まず「無」を単称名辞としてとるマイノング主義の立場を取り上げる。

### 3.2 単称名辞としての語法（非存在対象としての無）

既に述べたように、無についての思考の対象を「冷蔵庫には何もない」という文に現れるような量化表現としての無の語法で表現することはできない。そのため、無という志向的対象は単称名辞として表現されてきた。「無」を単称名辞とする場合、いかなる対象も指示しないと考える立場と、何らかの対象を指示する立場の2つに分けることができる。前節で述べた困難を主題として論じているのは、後者、すなわち、「無」は非存在対象を指示すると考えるマイノング主義の立場である。以下では、マイノング主義の中でも無の志向性に関する困難を無という非存在対象がもつ特有の性質として理解するグレアム・プリーストの非存在主義を概観し（3.2.1 節）、彼がどのようにして無という非存在対象を特徴づけているのかをみる（3.2.2 節）。

#### 3.2.1 プリーストの非存在主義

我々は、存在する対象についてはもちろんのこと、存在しない対象についても考えることができる。例えば、シャーロック・ホームズのようなフィクションの対象や、バルカンのような仮説上の惑星について何らかのことを考えることできる。これら存在しない対象について我々は様々な心的状態をもつが、我々がただ考えているというだけで、本当にこれらを真正の対象と認めてもよいのだろうか。例えば、「シャーロック・ホームズ」という名前はむしろ何も指示していないと考えるべきではないか。このような疑問に対して、そのような名前は対象を指示するということを積極的に主張するのがマイノング主義である。マイノング主義の立場をとるプリーストによれば、非存在対象を認めなければ解決しないケースがある。例えば、以下のようなケースである[54]。

---

[53] ただし、以下の議論において、単称名辞で表現できる無についての思考と文で表現できる無についての思考が同じものについての思考であるどうかは問題にしない。この章の目的は、他の章と同様に、文としての語法によって表現できる事柄が、無については単称名辞としての語法では表現できないことを理解することにある。

[54] Priest (2016), pp. xviii–xix（第一版邦訳：プリースト（2011）、pp. 141–142）.

マイノングは、オリンポスに住む最高神であるものはオリンポスに住んでいると信じていた。

この文は、「オリンポスに住む最高神であるもの」と表現されているものについてのマイノングの心的状態を表している。丸い三角は丸いということをマイノングが信じるのと同様、オリンポスに住んでいるものはオリンポスに住んでいるということをマイノングは信じることができるだろう。すなわち、上記の文は真である。さて、ラッセルの確定記述の理論によれば、「オリンポスに住む最高神であるもの」が指示するような対象（ゼウス）を必要としない仕方で、この文を記述の作用域に応じて次の2つに表現し直すことができる。

1. オリンポスに住む最高神である唯一のものが存在し、かつ、マイノングはそれがオリンポスに住んでいると信じていた。
2. マイノングは、オリンポスに住む最高神である唯一のものが存在し、かつ、それがオリンポスに住んでいると信じていた。

しかし、このように言い換えられると 1.も 2.も偽となってしまう。1.については、オリンポスに住む最高神である唯一のものは実際には存在しないからであり、2.については、マイノングはオリンポスに住む最高神である唯一のものが存在すると信じているわけではないからである。したがって、存在しない対象についての文の真理を説明するためには、非存在対象を認める必要がある。ただし、マイノング主義の主張は、非存在対象が何らかの意味で存在するというものではない。マイノング主義の主張は、マイノングが述べたように、対象は、それが存在するかどうかに関わらず、何らかの性質をもつというものである。すなわち、現実に存在する丸い机が丸いという性質をもつのと同様、現実には存在し得ない丸い四角も丸い性質をもつのである。対象は、自身を特徴づける性質をもつという考えは、特徴づけ原理（characterization principle）と呼ばれている。プリーストはこの原理について次のように述べている。

特徴づけ原理は、とりわけ、どのようにして私たちは非存在対象についてなんらかのことを知ることができるかを説明する。つまり、ある仕方で特徴づけられた対象はそれらの性質をもつということを、その対象がその仕方で特徴づけられたというまさにそのことゆえに、私たちは知っているのだ。[55]

[55] Priest (2016), p. 109–110（第一版邦訳：プリースト（2011）, p. vii）.

しかし、この特徴づけ原理には次のような2つの問題がある。まず、プリーストは存在するということを量化から切り離し、ひとつの述語として扱う[56]。このとき、どんな仕方で性質を組み合わせることも可能なのであれば、例えば、存在する黄金の山（the existent golden mountain）も対象として認められる。そして、この対象は存在するという性質をもつことになるが、実際には黄金の山は存在しない。すなわち、実際には存在しないような対象の存在が証明されてしまう。さらに、任意の文 B と、x=x∧B という条件を考え、この条件によって特徴づけられる対象を t とするとき、特徴づけ原理より、t=t∧B であり、ここから B が帰結する。したがって、任意の文が帰結するのである[57]。プリーストは、この問題を解決するために、久木田と藤川が「世界に相対化された特徴づけ原理」と呼ぶ以下の原理を導入する。

> 世界に相対化された特徴づけ原理： 任意の特徴づけについて、それによって特徴づけられた対象は、その特徴づけを含む描写を実現するあらゆる世界で、その特徴づけに含まれる性質をすべてもつ（その特徴づけを構成する式を充足する）[58]

この原理によって、存在する黄金の山や x=x∧B を満たす対象のような、現実世界ではそのように特徴づけることができない対象が、他の世界でその性質をもつことができるのである。ここでの世界とは、我々がある対象を心の中である仕方で特徴づけるとき、すなわち、その対象を描写する（represent）とき、その描写によって記述されるような世界のことである[59]。この世界に相対化された特徴づけ原理を背景に、単称名辞としての「無」が表現する対象も、適切な特徴づけを与えることで非存在対象のひとつとして認めることができるとプリーストは考える。

### 3.2.2 マイノング主義における無の問題

単称名辞としての「無」が指示する非存在対象はどのような特徴をもつのか。プリーストは、3.1 節で我々が確認した困難こそが無がもっている本質的な特徴であると考える。すなわち、一方で、我々は無について考えているのだから、無は何か（something）であるはずである。他方で、プリーストによれば、無はあらゆるものの欠如（the absence of everything）であるため、何か（something）ではない。このような、相反する性格をもつのが無という対象なのだとプリーストは考える[60]。では、それはどのように特徴づけられるのか。プリーストは、空集合の融合（the empty fusion）がそれにあた

---

[56] 存在は述語 E と表され、量化の範囲は非存在対象を含めるすべての対象領域である。そのため、プリーストは、一般的な量化子「∀」「∃」ではなく、「𝔄」「𝔖」を用いる。
[57] Priest (2016), p. 83（第一版邦訳：プリースト（2011）, p.110）, 久木田、藤川（2011）, p.262.
[58] 久木田、藤川（2011）, p. 264.
[59] Priest (2016), p. 84（第一版邦訳：プリースト（2011）, p.112）.
[60] Priest (2014), p. 151.

ると考える[61]。

融合とは、ある集合Σの要素だけを融合することによって構成される全体であり、部分と全体の関係を扱う形式理論であるメレオロジーにおいて以下のように定義される。まず、x が y の真部分（proper part）であることを「x<y」で表す。そして、x が y の部分（part）であることを、「x≤y」で表し、これを、「x は y の真部分であるか、あるいは、x と y は同一である（x<y∨x=y）」、と定義する。さらに、x と y が重複している（overlap）ことを次のように定義する。

x と y は重複している（xOy）： x と y の両方の部分であるようなものがある（$\mathfrak{S}$z(z≤x∧z≤y)）

さて、融合の例として、いくつかのピースからなるあるパズルについて考えてみよう。パズルを構成するためのピースの集合をΣとすると、Σの要素を融合させて得られる全体、すなわち、完成したパズルがΣの融合であり、「⊕Σ」とする。このとき、パズルの上にどんな大きさの紙を重ねても、必ずパズルを構成しているどこかのピースにその紙が重なることになる。このような性格を利用して、Σの要素の融合があることを次のように表すことができる。

任意の x について、x と y が重複するのはΣの要素 z と y が重複するときそのときに限る、そのような y がある。（$\mathfrak{S}$y$\mathfrak{A}$x (xOy↔$\mathfrak{S}$z∈ Σ xOz)）

すなわち、これはある集合Σの融合⊕Σがもつ性質である。性質 P を満たすようなもの（「x（an x such that Px）」を「εxPx」と表すならば、⊕Σは、すなわち、εy $\mathfrak{A}$x (xOy↔$\mathfrak{S}$z∈ Σ xOz)となる。前節で確認した、世界に相対化された特徴づけ原理によれば、どのような特徴づけであっても、ある対象がその特徴づけを充足するような世界で、その対象はその特徴づけに含まれる性質をすべてもつ。したがって、どんな性質 P についても、ある世界で$\mathfrak{S}$xPx が真であるならば、その世界では P（εxPx）も真である。そのため、以下はある世界では真である。

任意の x について、⊕Σが x と重複するのはΣの要素 z が x と重複するときそのときに限る。（$\mathfrak{A}$x (xO⊕Σ↔$\mathfrak{S}$z∈ Σ xOz)）

したがって、どこかの世界では、丸い三角が、丸く、かつ、三角であるという性質を同時に持つように、Σの融合は、現実世界を含むどこかの世界でΣの融合であればもつはずの性質を確かにもっているのである。

[61] *Ibid.*, p.152. プリーストと同じくマイノング主義の立場をとるカサティと藤川は、プリーストの主張に対して、その不備を指摘しつつ、無が全体の補（the complement of the totality）であると論じている（Casati & Fujikawa (2019)）。

さて、プリーストは、Σが空集合の場合もこのことが成り立つと考える。すなわち、空集合の融合も、現実世界ではないどこかの世界で、融合であればもつはずの性質をもつのである。この空集合の融合は、ある仕方で特徴づけられている対象であり、何か（something）であるが、同時に、空集合は要素を何も持たないため、その融合もあらゆるものが欠如していると考えられるのであり、すなわち、それは「無」と呼ぶことができる。このような仕方で、プリーストは、無についての思考がもつ困難を、無という非存在対象がもつ特殊な性質として理解する。

### 3.3 文としての語法と無についての思考の志向性

3.1 節で確認したように、無についての思考がもつ志向性には、それについて考えようとすると当の対象が他の対象に変わってしまうという困難が指摘されている。この節では、無を文としての語法のもとで考えた場合、何もないということについての思考がどのような志向性をもつのかを考察し、それを通して、この困難がどのように生じるのかを示す（3.3.1 節）。また、何もないということが志向的対象のひとつとみなすことができるのかという点について、ティム・クレインの志向性についての考察を参照し（3.3.2 節）、改めて、それがどのような性格をもつ志向的対象なのかを明確にする（3.3.3 節）。

#### 3.3.1 存在対象でも非存在対象でもない志向的対象としての無

我々は、これまでの章で、文としての語法のもとでの「何もないのか」という問いに対して、「何もない」は偽であると答えられると考えてきた。また、何もないのではないことに驚くという心的状態をもつということもありうるだろう。そして、文としての語法を明確にするために、例えば、「何もないのではない」ことは数えられるものに関する真理ではないということや、「何もない」は時間の経過に関係なく偽であると主張してきた。したがって、我々は何もないということについての思考、あるいは、少なくとも心的状態をもっていることになるだろう。さらに、もし、志向的対象が単に思考が向けられている事柄を意味するのであるなら、我々は何もないということを志向的対象とみなしてきたことになる。では、それはどのような性格をもつのだろうか。

前節で確認したプリーストの説との大きな違いは、何もないということは存在する対象ではないが、同時に、非存在対象でもないという点である。プリーストの説において、非存在対象の例として、例えば、シャーロック・ホームズのようなフィクションの対象、バルカンのような仮説上の対象、丸い四角のような存在することが不可能な対象が挙げられている。そして、これらの対象が現実世界には存在しないように、単称名辞で表される無も存在しないものとして検討されていた。しかし、文としての「何もないこと」は存在しないものを表さない。というのも、「存在しないものが存在する」あるいは「存在しないものは存在しない」が意味をなすのに対して、「何もないことが存在する」、「何もないこ

とが存在しない」はいずれも意味をなさないからである[62]。これは、「何もないことは存在するかどうかわからない」ということではない。問題になっているのが何らかのものであるならば、それがたとえ丸い三角であっても、存在するかどうかを問題にすることができる。しかし、何もないことはものではないため、「存在する」という述語をとらない。したがって、何もないことは、存在するものでも、存在しないものでもない。ここで、次のような疑問が生じるかもしれない。確かに、何もないことは、存在しないものではない。しかし、末尾に「こと」をつけることができる表現、すなわち、それだけで文として完結するような表現が「存在する」という述語をとることもあるのではないか。例えば、「激しい雨が降ることもある」と言うこともできるし、出来事や状態の存在が問題にされることもある。必ずしも「何もないことが存在する、あるいは、存在しない」という表現を排除する必要はないのではないか。このような疑問に対しては、繰り返しになるが、「何もないことが存在する」「何もないことが存在しない」が何を表しているのか不明確であると答えたい。このような表現が一見自然に思えるのは、英語の「nothing」が量化表現ではない場合には単称名辞としてしか用いられないという文法的な制約から、何もないことを表現するためには、「無が存在する（Nothing exists）」と表現しなければならないからであるかもしれない。しかし、必ずしもある特定の文法が事柄を適切に表すとは限らず、「何もないことが存在する」「何もないことが存在しない」が不明確であることに変わりはない。そのため、何もないことは存在する対象でないだけでなく、存在しない対象でもないのである。

では、無を文としての語法のもとで考えた場合、3.1 説で確認した無についての思考がもつ困難を、どのように説明することができるだろうか。3.1 節で確認した困難は、無について考えようとすると、それを現実に存在するもの、あるいは、何らかの性質をもつ何か（something）に変えてしまうというものだった。前者については、次のように考えることができる。例えば、我々が「何もない」を偽だと判断するとき、「何もない」や「何もないのではない」という文に対応する何らかの存在する事実に訴える必要はない。そのような判断をする際に、我々は同時に心の中で何かを思い浮かべたり、声に出してそのことを他者に伝えたりしているかもしれない。そして、確かに、これらの心的なイメージや行為は存在するといえるだろう。しかし、それらが「何もない」という文の意味なのではない[63]。また、

---

[62] この点はすでに松井がいくつかの箇所で指摘をしている。以下では、この点を「何も存在しないこと」と「存在しないもの」の対比として説明している。
「『何も存在しないこと』と『存在しないもの』では、それぞれが属する文法も異なる。『何も存在しないこと』については、それが可能であるかどうかは問えるが、それが『存在するかどうか』は問えない。『何も存在しないことは存在する（『存在しない』）』と言うのは、明らかに奇妙な表現だからである。」（松井（2018）, pp. 39-40）

[63] ここで、本論が念頭においているのは、ネーゲル（2015）の算術に関する思考についての議論である。ネーゲルは、「算術を学ぶには人々はどこかの地点で『足す』や『二』といった概念を端的に把握しなくてはならないのであり、この把握するとはすなわち、ここで正しいかどうかは合意に基づくのではない—例えば発音の規則と対比したとき—と理解することなのだ」と述べる。そして、その理由として、規則についてウィトゲンシュタインが述べたことをもとに、次のように述べている。「［中略］紙に印を付けることや声を発すること、物体をあれこれ扱うこと、いや心にイメージを思い浮かべることすら、思考するに等しいと見なすのは不可能である—文脈となる細部（共同体の実践も含め）をその手の説明にどれだけ付け加えようと—という点である。」（ネーゲル（2015）, pp. 58–59） ネーゲルは、「二を足せ」のような指示がもつ志向内容を何らかの事実に依拠して把握することはできないということを、「規範を含むものと規

後者については、確かに我々は、何もないということについて、それが数えられるものに関わらないということや、無時間的であるという性質をもつように述べてきた。もし無がいかなる性質ももたないのであれば、このことと我々が述べてきたことは両立しないかもしれない。しかし、我々が述べてきたことは、何らかのものが何らかの性質をもつということと同じではない。我々が述べてきたことは、「何もないのか」という問いが第一の問いとして問われる文脈では、「何もない」が表す事柄について、例えば、それが数えられるものに関するものであるという仕方で考えることはできないということであり、それは、「目の前の机の足は4つではない」ということを考えることとは異なるのである。

### 3.3.2 志向性の構造

プリーストは、志向性の入門書としてティム・クレインの著書（Crane(2001)）を挙げている。本節では、まずその中でクレインが指摘する志向性がもつ二つの特徴を確認する。クレインによれば、心的状態の志向性は、有向性とアスペクト形態という二つの特徴をもつ。有向性とは、次のような特徴である。絵画が常に何かについての絵画であるように、心的状態が志向性をもつためには何らかの対象をもたなければならない。心的状態が常に対象に向けられているという特徴を有向性（directedness）と呼ぶ[64]。次に、アスペクト形態（Aspectual shape）とは、どんな志向的状態においても、心が向けられている対象が特定の仕方で提示されているという特徴である[65]。それは絵画で言えば、何かが描かれるときには特定のパースペクティブのもとで描かれることに対応している。これら有向性とアスペクト形態という二つの特徴をもつ志向性は、次の3つの概念からなる構造をもつ。まず、1つ目が志向的対象である。志向的対象は何らかの存在論的身分をもつものではなく、例えば、ある思考の志向的対象は、「君は何について考えているのか？」「君の思考は何に向けられているのか？」という問いへの答えにおいて与えられる。2つ目は志向的内容である。クレインは次のような例を与えている。「君は何について考えているのかという問いに対して、私が『カプリにあるあのすてきなレストランのことさ』と答えるなら、私の思考の対象はそのレストランであり、『カプリにあるあのすてきなレストラン』という語句は私の心的状態の内容を与えている」[66]。さらに、3つ目は志向様式である。志向様式は、主体とその志向的状態の内容との関係であり、例えば、信念、希望、その他の命題的態度、欲求、思考、意図、近く、愛、恐れ、後悔、あわれみなどである[67]。

---

範なきものの間には断絶がある」ということを踏まえて主張している（*Ibid.*, p. 65）。何もないということについての思考も、同様の規範性が問題となると思われるが、この点については別の機会に考察したい。

[64] Crane (2001), p. 7（邦訳：p. 10）.

[65] *Ibid.*, p. 18（邦訳：p. 27）.

[66] *Ibid.*, p. 30（邦訳：p. 45）.

[67] *Ibid.*, p. 32（邦訳：p. 48）.

### 3.3.3 何もないことはどのような志向的対象か

クレインは、このような志向性の構造を説明する際に、文としての語法のもとでの「何もない」を想定しているわけではない。しかし、何もないということについて我々が考えているならば、その思考は志向性をもつ。では、この何もないということについての思考の志向性は、クレインの志向性の構造のもとでどのように説明することができるだろうか。

3.3.1 節で、我々は何もないことが存在対象でも非存在対象でもないと主張した。志向的対象を議論するプリーストもクレインも、存在対象でも非存在対象でもないような事柄については何も述べていない。では、何もないことは志向的対象であると考えられるだろうか。クレインによれば、ここでの対象という概念は図式的概念である。この対象の概念には、我々は日常的な意味での対象だけでなく、現実には存在しない出来事や、特定の身長をもたない人物（我々はある人の身長について確定することなく、その人について考えることができる）など、さまざまな事柄が含まれる[68]。そのため、個々の対象のすべてに共通するような本質があるわけではないとクレインは考える。また、クレインによれば、志向的対象は、今何について考えているかという問いに対する答えとなるものであった。これらの説明によれば、何もないということも志向的対象とみなすことができるだろう。

では、無はどのような志向的対象か。クレインによれば、志向的対象な常に何らかのパースペクティブのもとで提示される。我々は、この何もないということについても何らかのパースペクティブのもとで提示されていると考えるべきであろうか。この点を考える前に、何もないということについての思考を含む心的状態を以下の2つに区別しておきたい。

（A）何もないということに関する心的状態

（B）何もないことが何らかの性格をもつということに関する心的状態

いずれも何もないことに関する思考である。(A)の志向的内容は、何もないということ、あるいは、何もないのではないということでつきている。例えば、「何もないのではないと信じる」や「何もないのではないことに驚く」は（A）の例である。これに対して、（B）の志向的内容は、何もないことが何らかの性格をもつということである。我々が本論で述べてきたように、例えば、「何もないことは無時間的であること（を信じる）」などがその例である。（A）の場合、何もないことの志向的状態は、何らかのパースペクティブをもたない。そのため、志向的対象と志向的内容を区別することはできない。クレインは、対象そのものについての思考や注意などというものはなく、対象の「裸の」提示と呼べるようなものはないと述べている[69]。しかし、（A）の場合には、我々は何もないということについて何らかの観点のもとでそれについて考えるということができない。この場合には心的状態を絵画のようには考え

[68] *Ibid.*, p. 16（邦訳：p. 20）.
[69] *Ibid.*, p. 20（邦訳：p. 29）.

ることができないのである。(A)の場合は、「何もないのか」という問いを第一の問いとして問われる文脈で我々が問題にしてきたものに対応するだろう。他方で、(B)の場合は、我々は何もないということの様々な性格について考えるような場合である。そして、例えば、「何もないということはそれについてイメージをもつことができない」ということと「何もないということは空集合のことではない」ということを、1つの志向的対象についての相異なる2つ志向的内容として区別して考えることができる。単称名辞としての語法のもとでの無が(B)のような心的状態でのみ思考されるのに対して、文としての語法のもとでの何もないということについての思考がもつ志向性の特殊性は、我々が(A)のような思考をもつところにあるといえる。

# 第4章　補論：前期ウィトゲンシュタインにおける「世界が存在しない」ということ

この章では、ウィトゲンシュタインの「倫理学講話」において「私には想像できない事柄」として語られる「世界が存在しない」という文で、彼が何を想定していたのかを検討する。この検討を通して、「世界が存在するということに私は驚く」とウィトゲンシュタインが述べたときに、何に驚いていたのかを明確にし、さらに、前期ウィトゲンシュタインの「世界が存在する」ということと、我々がこれまで問題にしてきた、「何もないのではない」ことがどのような点で異なるのかを明らかにする。

## 4.1 「倫理学講話」における「世界が存在しない」

なぜあるものがあって何もないのではないのか（Why is there something rather than nothing?）という問いに対する解答可能性や有意味性の問題は、第2章でも述べたように、分析形而上学において継続して議論されている問題のひとつである。この問いについて議論される際、この「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文は常に同じ仕方で解釈されるわけではなく、この問いがいかなる存在についての問いであるか、何がその解答となりうるか、見解は一致していない[70]。そのため、この問いについて議論する際には、この問いをどのように解釈しているのかを明示する必要がある。

こうした多義性は、何かがある、世界が存在するということが驚きや神秘とともに語られる場合にも起こりうる。ウィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』（以下『論考』と略す）や「倫理学講話」で「神秘的なのは世界がいかにあるかではなく、世界があるということである。（6.44）」「私は世界の存在に驚く」[71]と述べている。彼はこれらの文をナンセンスであるとしながらも、人がこれらの文で何かを表現しようとする傾向をもつことを否定しなかった。この章では、前期ウィトゲンシュタインにおいて、これらの文に与えたくなる内容が何であったのか、何に対する驚きについて語ることができないと述べていたのかを、関連する他の事柄に対する驚きと区別できるような形で明らかにしたい。

そこで、以下では「世界が存在しない」という文でウィトゲンシュタインが何を想定していたのかに注目する。分析形而上学では、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という文における「何もない」の解釈に注目し、それが本当にまったく何もないということなのか、また、「何もない」の解釈の違いがどのように文全体の解釈に影響するのかといった問題に関する議論がある[72]。ウィト

---

[70] Brenner(2016)は、この文には唯一の解釈は存在せず、各々の発話者が明示的にあるいは暗黙に認めている存在論によって変わると主張する。

[71] Wittgenstein (1965), p.8（邦訳, p.388）. また、本論では、Wittgenstein(1922(1918))（『論考』）については、所見の番号を付し、野矢訳を参照した。

[72] Baldwin(1996)が提起した、具体的対象が存在しない可能世界の存在を擁護する形而上学的ニヒリズムの議論について、Coggins（2010）や Heil（2013）は、こうした「それはほんとうに無といえるのか」という点から考察をしている。コギンズとヘイルの主張、そして、彼らの違いについては本論第2章で述べている。

ゲンシュタインが「世界が存在しない」と述べる場合はどうだろうか。ウィトゲンシュタインは「倫理学講話」において、「私は世界の存在に驚く」がナンセンスである理由を、「世界が存在しないことが私には想像できないからだ」と述べている[73]。ここでウィトゲンシュタインが従来は想像可能であるかのように考えられる事柄として何を想定していたのか、他の無に関する理解と比較し明らかにしたい。

まず、ピーター・ヴァン・インワーゲンの偽装的な無（counterfeit nothing）という考えを手がかりとする。偽装的な無は、彼の 1996 年の論文「そもそもなぜ何かがあるのか（Why is There Anything at All?）」の最後で、このタイトルの問いへの自分自身の解答に対する疑念を表した言葉である。この偽装的な無についての疑念は、『論考』のようにすべての可能世界に同じ基礎的対象が存在するとした場合に生じるものであり、以下ではまずこの疑念から『論考』において問題となりうる無について考えてみたい。そして、ウィトゲンシュタインが問題にした世界の非存在が、この偽装的な無ともまったく何もないということとも異なる事柄であることを示す。

次節以降、以下の手順で考察を進める。まず、ヴァン・インワーゲン（1996）における偽装的な無という考えを述べ直す（4.2）。そして、これと対比させる形で、『論考』において考えられうる二つの無、すなわち、論理空間においていかなる事態も成立していない場合（4.3）と世界の非存在について確認する。後者の世界の非存在については、それが対象の非存在と不可分であること（4.4）、そして、「いかなる対象も存在しない」ということを語ることはできないこと（4.5）を確認した上で、世界の非存在がまったく何もないということとどう異なるのか検討する（4.6）。

### 4.2 偽装的な無

ヴァン・インワーゲンは、「なぜ何かがあるのか」という問いに対して、具体的対象が一切存在しないケースが現実となる確率はほぼゼロに近いことを示すことで答えようとする。しかし、彼はこの論文の最後で、何もない可能世界、具体的対象が存在しない可能世界が、一種の無の模造品、偽装的な無ではないかという疑念を提示している。ヴァン・インワーゲンによれば、こうした疑念は、彼が一連の検討において『論考』のようにどの可能世界にも同じ基礎的諸対象が登場することを暗に認めているような場合に生じる[74]。ヴァン・インワーゲン自身が最終的にこれを認めるとは述べていないが、仮にそれを認めた場合、具体的対象が一切存在しない世界について、彼は次のように述べている。

> かりにそうした場合、各世界に登場する基礎的対象は、空間における点のようなものとなり、そのそれぞれが「オン」／「オフ」あるいは「満」／「空」といった二つの可能的状態をもってい

[73] Wittgenstein (1965), p. 9（邦訳、p. 389）.
[74] van Inwagen (1996), p. 109（邦訳 p. 78）.

ることになるだろう。そうすると私は、空っぽな世界を、基礎的対象のすべてが「オフ」または「空」の状態にあるような世界として捉えているということだろうか。[75]

基礎的対象がどの可能世界にも登場するならば、何もない可能世界にもそれらは登場する。そのため、この世界では、基礎的対象はいずれも「オフ」となっているものの、基礎的対象が何らかの仕方で存在していることに変わりはない。ヴァン・インワーゲンが「偽装的」と呼ぶのは、このような可能世界には、基礎的対象が存在しかつ存在しないというような矛盾が生じているように思われるからであろう。このような指摘はウィトゲンシュタインの『論考』の枠組みにおいて問題となる無にもあてはまるのだろうか。

### 4.3 どの事態も成立していない場合

ヴァン・インワーゲンが偽装的な無と呼んだものは『論考』の枠組みのどこにあてはまるのだろうか。この点について、本節以降ではヴァン・インワーゲンの用語から離れ、主に『論考』における用語とともに検討したい[76]。

ヴァン・インワーゲンによる偽装的な無という疑念が『論考』において直接あてはまるのは、論理空間において要素命題が表現する事態のいずれもが成立していない場合である。ウィトゲンシュタインによれば、事態は諸対象の配列からなり、成立か不成立かの2通りの可能性がある。例えば、世界に成立しうる事態が2つしかない場合を考えよう。この場合、事態の成立・不成立の組み合わせは4通りある。すなわち、（事態 a、事態 b のみが成立しうるとすれば、）事態 a も事態 b も成立していない場合、事態 a のみが成立している場合、事態 b のみが成立している場合、そして、事態 a と事態 b の両方が成立している場合の4通りである（4.27）。さて、ある事態を表現している要素命題は対象を表現する名の配列からなる。要素命題は、それが表す事態が成立している場合に真、不成立の場合に偽となる。そのため、要素命題の真偽の組み合わせは、事態の成立・不成立の組み合わせと同じ数だけある（4.28）。そして、すべての要素命題の真偽を確認すれば、世界を完全に記述することができる（4.26）。ここで明らかにウィトゲンシュタインは、どの事態も成立していない場合、すなわち、どの要素命題も偽となるような場合を排除していない。成立しうる事態がどれだけ多くても、つまり、論理空間がどれだけ大きくても、諸事態の成立・不成立の $2^n$ 個の組み合わせの中に、どの事態も不成立である場合が含まれるのである。

この、どの事態も成立していない場合を無とみなせば、ヴァン・インワーゲンの偽装的な無と同様

---

[75] *Ibid.*, p.110（邦訳 p.79）.

[76] 以下、奥、野矢訳に従い、‘Satz’を「命題」と訳すが、『論考』においてそれは（偶然的側面として）文としての性格ももつ（3.34を参照）。また、命題が表現する‘Sinn’は「意義」、単純記号である名が表現する‘Bedeutung’は「意味」と訳す。

の次のような疑念が生じうる。要素命題がすべて偽であるとするためには、予めすべての要素命題の意義が確定していなければならない（4.064）。そして、次節で確認するように、要素命題の意義が確定しているためには世界の実体としての対象が存在しなければならず、そして、この実体は事態の成立・不成立とは独立に存在する（2.0231）。したがって、事態の不成立が対象の非存在を含意するとすれば、対象が非存在であるにもかかわらず、対象が存在するというヴァン・インワーゲンの場合と同様の矛盾が生じるのである。ヴァン・インワーゲンとウィトゲンシュタインで異なるのは、ヴァン・インワーゲンが各々の基礎的諸対象に対して、「オン」と「オフ」という2つの可能的状態を考えていたのに対し、ウィトゲンシュタインは事態に対して、成立か不成立かを考えている点にある。

では、ウィトゲンシュタインは「世界の非存在」として、こうしたどの事態も不成立であるような場合を考えていたのだろうか。仮にそうであれば、世界が存在しないということを、要素命題のすべてを否定した命題によって表現することができるだろう。しかし、実際には、「世界が存在しない」はナンセンスであるとされている。そのため、世界の非存在は、どの事態も不成立である場合ではなく、そもそもいかなる対象も存在しないような場合であると考えられる[77]。すなわち、それは命題の意義（命題が記述する状況、事態）の確定に必要な対象がそもそも存在しない場合である。

### 4.4 対象の存在と世界の存在

『論考』において世界の存在が対象の存在と不可分であることは、世界が事実の総体であり、事実が世界の実体である対象の配列からなるとされていることから明らかである。では、なぜ世界は単純な構成要素からなるのか。ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

> 2.0211　世界にいかなる実体も存在しないとしたら、命題が意義をもつか否かは、他の命題の真偽に依存してしまうことになる。
>
> 2.0212　そのとき、世界の像を（真であれ偽であれ）描くことは不可能である。

すなわち、世界の像を描くことが可能であるならば、世界には少なくともひとつの対象が存在しなければならない。さらに、ウィトゲンシュタインは対象を表す名について、「単純記号へと分析可能であるという要請は、すなわち、命題の意義が確定していることの要請にほかならない。（3.23）」と述べている。こうした所見から、ウィトゲンシュタインが、世界が最も単純な構成要素からなっているのは、世界の事実を描写する命題の意義が確定しているからであると考えていたことがわかる。

では、命題の意義が定まっているために、なぜ世界が単純な構成要素からなるのでなければなら

---

77 野矢（2006）では、どの事態も不成立である場合といかなる対象も存在しない場合に違いはないものとみなしている（野矢（2006）、p.186–188）。しかし、本稿では、ウィトゲンシュタインが、事態の不成立によって対応する要素命題が偽であるのに対し、世界の非存在を表す命題をナンセンスとしている点から、これらを区別する。

ないのか。まずここで名や対象について問題となる「単純さ」について確認する必要がある。鬼界（2003）によれば、ウィトゲンシュタインは『論考』の執筆過程において二種類の単純さの概念を検討している[78]。ひとつは、物体のような複合物がどこまで分割、分解できるかが問題となるような単純さであり、何が単純であるかは将来の経験科学によって定まる。もうひとつは、言語の話し手である私が「もの」として対象化し、それに名を与える作用に着目した場合の単純さである。例えば、眼前のこの時計は、歯車などの部品へと分解することは可能だが、「この時計」という語で何かを名指す際、それを分解する必要はない。すなわち、私がこの時計の中に歯車があるかどうかを知らない場合でも「この時計は引き出しの中にない」と語ることができるからである[79]。この単純さの概念のもとで、命題の意義の確定に関わる命題の構成要素としての名は、物体だけでなく、関係、性質といったものも指すとウィトゲンシュタインは考えており、『論考』で採用されているのはこの後者の単純さの概念である。この点を踏まえると、次のようになるだろう。命題の意義が定まっているためには、命題の構成要素である名の意味が確定している必要がある。そして、そのためには、名の意味である対象を私が世界の構成要素として把握していなければならない。したがって、私が把握する世界の単純な要素である対象の存在が命題の意義の確定の根拠となっているのである。

では、ある人がすでに使用している名の意味を我々はどのように知ることができるのか。ウィトゲンシュタインによれば、名を定義することはできず、対象が何であるかを語ることはできない（3.26, 3.221）。名が意味する対象の把握は、その対象の論理形式、その対象がどのような事態のもとに現れうるかを把握することによってはじめて可能となる。そのため、対象を表す名がその対象の論理形式に従ってある命題の中で使用されることによって、それが何の名であるかを把握することができる（3.327）。

このように、命題の意義の確定の根拠として対象は存在するが、それが何であるかを語ることはできない。ウィトゲンシュタインはこれと同様の考えを、要素命題の相互独立性の主張を放棄した後、「倫理学講話」と近い時期にももっていた。1930 年 1 月のヴァイスマンのノートによれば、ウィトゲンシュタインは、「ある同じ場所が赤くかつ青いということはありえない」という構文法の規則の妥当性の根拠をシュリックに問われ、次のように答えている。

> ［構文法の規則の妥当性の根拠となるような経験的認識は］存在する、そして存在しない。それはまったく、人が経験的という事で何を理解するかに依存する。もし人が経験的認識という事で、或る命題で表現され得る認識を理解するとすれば、それは経験的認識ではない。もし人が経験的認識という事で或るもっと別のものを理解するとすれば、構文法もまた経験的で

[78] 鬼界（2003），pp.109–114. また、以下で述べる「対象の単純さ」と「対象を名指す私」との関係については、荒畑（2009）, pp.181–183 も参照。
[79] Wittgenstein（1979）, p.64–65（邦訳、p.239）.

ある。私はかつての論文において、論理は「いかに」のまえにあるが、「何が」のまえにはないと言った。論理は、(何かが現に存在するという意味で)何かが存在するという事に、即ち、事実が存在するという事に、依存している。しかし、それは事実がいかなる状態であるかということには、即ち事実がそのようにあるという事には、依存しない。[80]

ここでもウィトゲンシュタインは「かつての論文」である『論考』の所見を挙げながら、構文法の根拠となる事実は存在するが、それは命題によって表現できる事実ではないとしている。

以上から、「世界が存在しない」で想定されている事柄とは、単に、世界の構成要素が存在しないということだけでなく、私が有意味な仕方で世界について語ることの根拠が存在しないということであることがわかる。

### 4.5 「いかなる対象も存在しない」は語ることができない

では、対象が一切存在しないと語ることはなぜできないのか。『論考』において、ラッセルの確定記述句と同様、複合的なものについての命題は、その複合的なものが存在しない場合、ナンセンスであるのではなく偽である(3.24)。しかし、「いかなる対象も存在しない」といった命題はナンセンスとされている。

いかなるものも存在しないということを表現しようとする際、しばしば同一性を用いて「$\sim\exists x(x=x)$」と表す。この場合、「自分自身と同一である」は、すべてのものがもっている一種の性質とみなされている。しかし、ウィトゲンシュタインは同一性を対象の性質とは捉えない。ウィトゲンシュタインによれば、記号「a=b」という形式の表現は、記号「a」と「b」が置換可能であることを表現しているのであって、「a」の意味と「b」の意味の関係を表現しているのではない(4.241)。

ウィトゲンシュタインが「=」を対象の性質や関係と捉えないのは、前節で述べた命題の意義の確定ということに関わっている。「a=b」の「a」と「b」がいずれも対象を表す名である場合、話し手である本人にとっては「a」や「b」の意味は予め確定しているのでなければならない。そのため、「a=b」が真であるかどうかは、世界の事実を確認する前に確定している。さらに、「a」や「b」の意味が不明である場合には、当人がこれらの記号をいくつかの命題の中でどのように使用しているかをみなければならない。この場合も、確認する必要があるのはそれらの記号が現れる命題の使用であって、世界の事実ではない。そして、もし「a」や「b」の意味が確定しないような場合には、これらの記号を含む「a=b」が何と何について同一性を主張しているのか理解できない(4.243)。したがって、いずれの場合も対象同士の同一性を表すようにみえる命題は、世界の事実と比較することができず、疑似

---

80 Wittgenstein(1967), p.77(邦訳 p.109).

命題とされているのである[81]。

事実を参照しなければ真偽が決定しないよう命題の中には、一見すると何らかの同一性を表現しているようにみえるものがある。例えば、「(ある事故の)ただ1人の生存者は人物 c と同一人物である」というような命題の場合である。「～は(ある事故の)生存者である」をSとすると、「∀x(Sx→x=c)」と表せるかもしれない。しかし、ウィトゲンシュタインの記法によれば、これは同一性を用いない仕方で表さなければならない。すなわち、「∃x(Sx→Sc)∧～∃x,y(Sx∧Sy)」、つまり、「S であるものが存在するならば Sc であり、かつ、S である2つの異なるものは存在しない」と表せる(5.5321)[82]。そして、この同一性を含まない命題は、確かに事実を参照することによって真偽が決定するのである。

したがって、記号同士の同一性ではなく対象の同一性を想定して表現される「～∃x(x=x)」も擬似命題となる。ウィトゲンシュタインは、次のような仕方で、この命題が、いかなる対象も存在しないことを表現するものではないと説明する。

> 5.5352　同様に「ものは存在しない」を「～(∃x).x=x」によって表現したくなりもしよう。しかし仮にこれが命題であるとすれば、この命題は「ものが存在」するものの、これらのものが自分自身と同一でない場合にも、真となってしまうのではないだろうか。

まず、「～(∃x).x=x」、すなわち、「～∃x(x=x)」、「自分自身と同一であるものは存在しない」が命題であり、「～は自分自身と同一である」は「～は赤い」と同様にものの性質を表現していると仮定しよう。そして、この命題がどのような場合でも「ものは存在しない」ということであるとしよう。この場合、「自分自身と同一でないものが存在する」についても、(それが偽であったとしても)有意味に表現することはできるだろう。そして、「自分自身と同一であるものは存在しない」が真であると同時に「自分自身と同一でないものが存在する」が真である場合を排除することはできない。それは、「赤いものは存在しない」と「赤くないものが存在する」が同時に真となりうるのと同様である。そして、これでは「ものは存在しない」という最初に表現しようとした内容を表しているとはいえなくなってしまう。したがって、いかなる対象も存在しない場合、すなわち、世界の非存在を表現することはできないのである。

### 4.6 世界が存在しないならばまったく何もないのか

以上を踏まえて、前期ウィトゲンシュタインにおける世界の非存在がまったく何もないということかを検討したい。まず、世界の非存在には、ヴァン・インワーゲンが提示した偽装的な無に関する疑念はあてはまらない。4.2 節で確認したように、偽装的な無についての疑念は、対象が存在し、か

---

[81] 命題と現実との比較の問題については、入江(2015)を参照。
[82] ウィトゲンシュタイン(2003), p.205、野矢による注(77)を参照。

つ、存在しないというような矛盾に関するものであった。世界の非存在の場合、どの事態も不成立であるような場合とは異なり、対象は単に存在しないのであって、矛盾が生じる余地はない。したがって、世界の非存在は偽装的な無ではない。

では、前期ウィトゲンシュタインにおける世界の非存在を、まったく何もないということと同じだと考えることができるだろうか。4.4 節で確認したように『論考』が想定している対象は、われわれの命題の意義が確定していることの根拠となる特定の諸対象である。では、これらの対象以外のものは存在しないのだろうか。

> 「しかし命題によって表現不可能なもの（そして対象でもないもの）は存在不可能だ、というのか」仮にこのようなものが存在するとしても、これはまさしく言語によって表現不可能であろうし、これについて問うこともできない。[83]

ウィトゲンシュタインによれば、私にとって表現可能なものは最終的には私の命題の意義の構成要素である対象に限られている。そのため、それ以外のものについては表現不可能であり、それ以外に何かがあるかどうかを問うことはできない。

確かに、少なくとも『論考』の枠組みにおいては、表現可能なもの以外のものがあるかどうかを有意味に語ることはできないかもしれない。しかし、そのことから、表現可能な対象だけが存在する、すなわち、世界が存在しなければまったく何もないのだとはいえない。したがって、ウィトゲンシュタインが神秘ということで問題にしたのは、現実にはまったく何もないのではないのはなぜかということではなく、我々が世界をある決まった仕方で描写することができる、その根拠としての特定の諸対象がなぜ存在するのかということである。世界の存在に驚く場合は、私が用いる命題の意義が定まっており、その根拠の存在を認めていなければならない。しかし、まったく何もないのではないということに驚く場合があるとすれば、それらを認める必要はない。このように、前期ウィトゲンシュタインの世界の非存在、ヴァン・インワーゲンの偽装的な無、そして、まったく何もないということは、それぞれ別の事柄なのである。

---

[83] Wittgenstein（1979）, pp.51–52（邦訳、p.216）. また、*Ibid.*, p.31（邦訳、p.178）も参照。

## 結論

序論では、松井の「まったく何もない」という可能性に関する議論を、文としての語法と「全く何もないのか」が第一の問いとして問われる文脈の二つの点から提示し、さらに、文としての「無」の語法を、分析哲学において既に論じられている無の量化表現としての語法と単称名辞としての語法と対比させ、その違いを理解することを、本論の主な目的として設定した。

第1章では、量化表現としての語法のもとでの「無（nothing）」がものの数を主題にしているのに対し、文としての語法のもとでの「無（何もない）」はそうではないと主張した。まず、「何もない」という文を量化表現としての「nothing」を含む文に置き換えることができるという想定されうる見解を提示した。次に、ここでの「数えられる」「数えられない」ということの意味について、オルソンの説明を参照し、最後に、「何もないのか」が第一の問いとして問われる文脈において、文としての語法のもとでの「無」が量化表現を含む文に置き換えることができないと主張した。

第2章では、文としての語法のもとでの何もないということの真偽を問題にするとき、様相表現は不可欠とはいえず、可能世界意味論を用いる必要がないと主張した。まず、松井の議論と分析形而上学における形而上学的ニヒリズムの議論のそれぞれにおいて、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いと「何もないということが可能である」ということがどのように関わるかを確認し、次に、形而上学的ニヒリズムの議論の一部を確認した。そして、最後に、「無」の文としての語法のもとで「まったく何もない」が様相表現とともに用いられる場合を検討し、いずれの場合も様相表現が真理値に影響せず、「何もない」の真偽が問題となる文脈において様相表現は不可欠なものではないことを示した。

第3章では、無についての思考がどのような志向性をもつのかという問いに対して、「無」を単称名辞とするマイノング主義の分析と「何もない」を文とする場合での分析を対比させた。無について考えようとすると、その対象が別の何かになってしまうという困難について、マイノング主義の立場をとるプリーストは互いに相矛盾する性質をもつ特殊な非存在対象として無を特徴づけることによって解決する。それに対して、無を「何もない」という文が表現する事柄として解する場合には、無についての思考は志向的対象をもつが、それは存在対象でも非存在対象でもないと主張し、困難が生じないことを示した。さらに、そのような志向的対象が認められるかどうか、そして、それがどのような志向的対象であるかということをクレインの志向性に関する説明を手がかりとし、考察した。

第4章では、補論として、ウィトゲンシュタインの「倫理学講話」において「私には想像できない事柄」として語られる「世界が存在しない」という文で、彼が何を想定していたのかを検討した。まず、ヴァン・インワーゲンが「偽装的な無」という言葉で表現した、無という概念についての疑念を確認した。そして、そうした疑念が、ウィトゲンシュタインが想定した「世界が存在しない」ということにあては

まるかを検討した。この検討によって、ウィトゲンシュタインが「世界が存在するということに私は驚く」という文で表そうとした驚きが何に向けられているのかを明らかにし、また、それがまったく何もないのではないということへの驚きとは区別できると主張した。

## 付記

本稿の執筆にあたって、下記の拙論（1）を第2章の一部に、（2）を第4章に、修正し利用した。

(1) 「『根本の問い』と形而上学的ニヒリズム―無は可能世界のひとつか？」『愛知：φιλοσοφια』26 号、2014 年、神戸大学哲学懇話会、pp. 112-126

(2) 「前期ウィトゲンシュタインにおける『世界の非存在』―ヴァン・インワーゲンの偽装的な無との対比から―」を『愛知：φιλοσοφια』29 号、2017 年、神戸大学哲学懇話会、pp. 43-57

第1章、第3章、序論、結論は書き下ろし。

## 参考文献


（和文）

青山拓央（2012）『分析哲学講義』、筑摩書房

青山拓央（2016）『時間と自由意志　自由は存在するか』、筑摩書房

荒畑靖宏（2009）「ウィトゲンシュタインとガダマー―有限な理性の不遜な夢」『ヨーロッパ現代哲学への招待』、梓出版社、pp.176-202

————（2016）「カルナップ、ウィトゲンシュタイン：形而上学的なものをめぐる誤解と理解」『続・ハイデガー読本』（秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編）、法政大学出版局、pp. 287–295

秋葉剛史、倉田剛、鈴木生郎、谷川卓（2014）『現代形而上学　分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社

飯田隆（1985）「可能世界」『新　岩波講座　哲学7　トポス　空間　時間』、岩波書店

———（1987）『言語哲学大全Ⅰ　論理と言語』、勁草書房

———（1995）『言語哲学大全Ⅲ　意味と様相（下）』、勁草書房

———（2012）「複数論理と日本語意味論」『哲学の挑戦』（西日本哲学会編）、春風社

伊佐敷隆弘（2010）『時間様相の形而上学　現在・過去・未来とは何か』、勁草書房

————（2015）「なぜ無ではなく何かが存在するのか：分析哲学における形而上学の盛衰」『研究紀要』(77)、pp.181–200、日本大学経済学部

入江俊夫（2014）「ウィトゲンシュタインの転回に関する一考察―数学の哲学の視点から―」『千葉大学人文社会科学研究(29)』、千葉大学大学院人文社会科学研究科、pp. 57–70

————（2015）「ウィトゲンシュタインの操作概念のある重要な側面について：『論考』6.1261「論理学において過程と結果は同等である」」『千葉大学人文社会科学研究(31)』、千葉大学大学院人文社会科学研究科、pp. 79–93

鬼界彰夫（2003）『ウィトゲンシュタインはこう考えた―哲学的思考の全軌跡 1912-1951』、講談社

久木田水生・藤川直也（2011）「訳者解説」『存在しないものに向かって　志向性の論理と形而上学』（久木田水生・藤川直也訳）、勁草書房

野矢茂樹（2006）『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』、筑摩書房

ネーゲル, T.（2015）『理性の権利』（大辻正晴訳）、春秋社

藤川直也（2014）『名前に何の意味があるのか』、勁草書房

プリースト, G.（2008）『一冊でわかる　論理学』（訳：菅沼聡、解説：清水哲朗）、岩波書店

————（2011）『存在しないものに向かって　志向性の論理と形而上学』（久木田水生・藤川直也訳）、勁草書房

丸山栄治（2014）「「根本の問い」と形而上学的ニヒリズム―無は可能世界のひとつか？」『愛知』26号、神戸大学哲学懇話会、pp. 112–126
————（2017）「前期ウィトゲンシュタインにおける「世界の非存在」：ヴァン・インワーゲンの偽装的な無との対比から」『愛知』29 号、神戸大学哲学懇話会、pp. 43–57
松井吉康（2018）『存在の呪縛』、晃洋書房

（欧文）

Baldwin, T. (1996). “There Might Be Nothing,” *Analysis* 56 (4), pp. 231–238
————. (2001). *Contemporary Philosophy: Philosophy in English since 1945*. Oxford, Clarendon Press.
Brenner, A. (2016). “What do we mean when we ask “why is there something rather nothing?” *Erkenntinis* 81 (6), pp. 1305–1322
Carnap, Rudolf (1932). “Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache,” Erkenntinis, Band 2
Casati, F. & Fujikawa, N. (2015) “Better than Zilch?” *Logic and Logical Philosophy* 24, pp. 255–264
——————————. (2019) “Nothingness, Meinongianism and inconsistent mereology,” *Synthese* 196 (9), pp. 3739–3772
Coggins, G. (2010). *Could There Have Been Nothing? Against Metaphysical Nihilism*, Palgrace Macmillan.
Conee, E. (2005). “Why Not Nothing?” *Riddles of Existence: A Guided Tour of Metaphysics*, Conee, E. and Sider, T. (ed.), Oxford University Press. （邦訳：「何かがあるのはどうしてか」（小山虎訳）『形而上学レッスン　存在・時間・自由をめぐる哲学ガイド』、春秋社、2009 年）
Crane, T. (2001). *Elements of Mind*. Oxford University Press（邦訳：ティム・クレイン『心の哲学ー心を形づくるもの』（植原亮訳）、勁草書房、2010 年）
————. (2012). “Existence and quantification reconsidered,” *Contemporary Aristotelian Metaphysics* ed. Tuomas E. Tahko. Cambridge University Press（邦訳：ティム・クレイン「存在と量化について考え直す」（植村玄輝訳）『アリストテレス的形而上学』、春秋社、2015 年）
————. (2013). *The Objects of Thought*. Oxford University Press
Heil, J. (2013). “Contingency,” *The Puzzle of Existence: Why Is There Something Rather Than Nothing?* ed. Tyron Goldschmidt. Routledge. 2013, pp.167–181
Jacquette, D. (2013). “About Nothing,” *Humana Mente* 6 (25), pp. 95–117

Kuusela, O. (2008). *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*. Harvard University Press.

Lewis, D. (1986). *On the Plurality of Worlds*. Blackwell Publishing.

Lowe, E. J. (1996). “Why Is There Anything at All? :II,” *Aristotelian Society Supplementary Volume*, Vol70, pp. 110-120.

——————. (2002). “Metaphysical nihilism and the subtraction argument,” *Analysis* 62, pp. 62–73

Matsui, Y. (2007). “Der Bann des Seins”, Philosophisches Jahrbuch 114. Jahrgang / 2 （邦訳:「存在の呪縛」（松井吉康訳）『思想』(1025)、岩波書店、2009 年、pp. 141–157）

Munitz, M. K. (1990). *The Question of Reality*, Princeton University Press.

Nolt, J. (2018). “Free Logic,” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (2018 Edition), ed. E. N. Zalta, <URL=https://plato.stanford.edu/entries/logic-free/>

Oliver, A. and Smiley, T. (2013a). “Zilch,” *Analysis*73, pp. 601–613

————————————(2013b). *Plural logic*. Oxford University Press.

Olson, Eric T. (2012). “Identity, Quantification, and Number,” Contemporary Aristotelian Metaphysics, Cambridge University Press, pp. 66–82（邦訳:エリック・T・オルソン「同一性・量化・数」（鈴木生郎訳）『アリストテレス的形而上学』、春秋社、2015 年））

Plantinga, A. (1979). “Actualism and Possible Worlds,” *The Possible and the Actual*, edited by Loux, M. J. London, Cornell University Press.

Priest, G. (2014). “Much Ado about Nothing,” *Australasian Journal of Logic*, 11(2), pp. 146–158

————(2016). *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*, Oxford University Press.

Quine, W. V. (1961). “On What There Is,” *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays*, Second Edition, Revised., pp. 1–19 （邦訳:「なにがあるのか」『論理的観点から　論理と哲学をめぐる九章』（飯田隆訳）、勁草書房、1992 年）

Rescher, Nicholas. (1984). “On Explaining Existence (Real Possibility as the key to Actuality)”, Metaphysics: Contemporary Readings. Ed. Steven D. Hales. Wadsworth. 1999, pp. 7–25

van Inwagen, P. (1996). “Why is There Anything at All?” *Proceedings of the Aristotelian Society. Vol. 70*, pp.95-110 （邦訳:「そもそもなぜ何かがあるのか」（青山拓央、柏端達也、谷川卓訳）『現代形而上学論文集』、勁草書房、2006 年、pp.57–84）

Wittgenstein, L. (1922(1918)). *Tractatus Logico-Philosophicus*. Routledge & Kegan Paul （『論理哲学論考』奥雅博訳、『ウィトゲンシュタイン全集1』、大修館書店、1975 年;『論理哲学論考』野矢茂樹訳、岩波文庫、2003 年）

——————— (1965). “*A Lecture on Ethics*” *Philosophical Review*, Vol. 74, No.1 (Jan., 1965), pp. 3-12,（「倫理学講話」『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』黒崎宏訳、全集5、1976 年）

——————— (1967). *Friedrich Waismann: Wittgenstein und der Wiener Kreis* Aus dem Nachlaß herausgegeben von B.F. McGuinness, Basil Blackwell, Oxford（『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』黒崎宏訳、全集5、1976 年）

——————— (1979). *Notebooks, 1914–1916* Second edition, edited by G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe with an English translation by G. E. M. Anscombe, Index prepared by E. D. Klemke, The University of Chicago Press.（『草稿一九一四—一九一六』奥雅博訳、『ウィトゲンシュタイン全集1』、大修館書店）

——————— (2009). P. M. S. Hacker, Joachim Schulte (ed.) *Philosophical Investigations* (4$^{th}$ed), Willey-Blackwell.（『哲学探究』藤本隆志訳、全集8、1976 年）